町民参加の町史づくり

竹富町史だより

第49号
2022年３月31日

竹富町教育委員会
沖縄県石垣市新栄町６－18
TEL（０９８０）８７－６２５７

目　次

〈表紙解説〉「ムシャーマ」（波照間島）……1

波の上炭鉱のなぞ……（里井 洋一） 2

波上炭坑探索記……（安里 淳） 4

望郷 鳩間島……（吉川 安一） 13

友利御嶽の扁額にみる鳩間与人について……（田代 浩和） 19

わらじの民俗……25

マシュク村遺跡幻想……（西前津 松市） 26

第42回竹富町史編集委員会議事録……27

2021年度 竹富町史編集日誌……33

『竹富町史だより』〈第48号〉正誤表……34

2021年度 受贈図書一覧……35

編集後記……40

表紙「ムシャーマのミチョサネー」（波照間島）

1980年代前半、前組のミチョサネー（仮装行列）〔撮影：石垣久雄〕

〈表紙の解説〉

「ムシャーマ」（波照間島）

表紙の写真は、波照間島のムシャーマの写真です。写真は、竹富町史編集委員長・石垣久雄氏より、ご寄贈いただいたなかの１枚です。

撮影された正確な年は、残念ながら覚えていないとのことでしたが、「ムシャーマを沖縄県の無形文化財として登録しようとの動きがあった1980年代前半、波照間島に調査のため、何度か訪れた時のもの」と返事がありました。

波照間島の旧盆行事であるムシャーマはソーリン（精霊祭）と対をなして「ソーリン・ムシャーマ」ともいわれ、一括して盆行事としてとらえられており、ムシャーマはソーリンのナカヌピン（中の日）に行なわれています。

『竹富町史 第七巻 波照間島』（以下『竹富町史』）によると、ムシャーマは旧暦７月14日に行われ、「五つの集落を西、東、前の三つの組に分け、現在は３組で執り行われる。すなわち、西組は冨嘉と名石の２集落、東組は北と南の２集落、前組は前集落から構成されている」とあります。

波照間島出身の町役場職員や、来庁者のみなさんに聞き取りをした結果、表紙の写真は、前組のミチヰサネー（仮装行列）の一枚だということがわかりました。

石垣委員長から頂いた写真は、ほかにも沢山ありました。各集落で違う表情をした「弥勒神」や「獅子」や「鬼」の面。波照間島では弥勒の夫といわれている「ブーブザー」の姿、「玉踊り」や「笠踊り」、舞台で披露される舞踊の数々、「一番コンギー」（狂言）、舞台演目の最後である東組による「コームッサー」、笛や三線を奏でる地謡の姿、「棒」を打つ若者たち、法被に鉢巻き姿の子どもたち、そしてそれを見守る桟敷の人々。

中庭での演目が終わると、すべての島人は早々と仮装行列の服装に着替え、帰りの仮装行列が行われます。帰りの行列は午前中の演目をそのまま演じながら各控え場（部落会館、または所定の場所）へ戻り、そこでテーク（太鼓）とボー（棒）のトゥミ（止め）が行われます。一方公民館の桟敷では来賓と公民館役人がマルブサ（ダンドク）の葉を鉢巻に巻き込んで頭に巻き、《弥勒節》と《ヤーラーヨー節》を歌い、ムシャーマの無事終了を喜び、全日程が終わります。

写真を通して、感じるのは、ミチヰサネーに参加する演じ手のリラックスした表情と、舞台に立つ演じ手の緊張した表情です。

日常の住み慣れた道を踏みしめながら向かう、非日常の舞台へ向かう姿には、島最大の行事を、島中で演じ、見守り、支え合う人々の姿が見えました。

（米盛恭子）

参考資料

◆『竹富町史 第七巻 波照間島』（竹富町、2018年）参照。

◆『波照間島のムシャーマ』（波照間民俗芸能保存会、1982年）参照。

［写真撮影・提供：石垣久雄］

波の上炭鉱のなぞ

里　井　洋　一

はじめに

2021年（令和３）７月、編集中の『竹富町史 第八巻 西表島』〈上〉のコラムとして、「波の上炭鉱のなぞ」という原稿を起草した。この時点で、波の上炭鉱の場所はヒナイサーラなのか、わからなかった。

その後、波の上炭鉱がどこにあるのか、ヒナイサーラ周辺の山に詳しい西表島の村田行（すすむ）さんに相談したところ、波の上炭鉱探索を12月４日一緒にすることになった。

「波の上炭鉱のなぞ」は、「波の上炭鉱探索」を呼び起こすことになったので、『竹富町史 第八巻 西表島』〈上〉のコラムから外し、安里淳さんの「波上炭鉱探索記」とともに、本号に掲載することにした。したがって、「波の上炭鉱のなぞ」は2021年７月時点での認識である。

波の上炭鉱のなぞ

1920年（大正８）年、『先島新報』に、「現在、八重山炭鉱、沖縄炭鉱、琉球炭鉱、波上炭鉱があり採掘している(＊１)」と報じている。八重山炭鉱、沖縄炭鉱、琉球炭鉱に関しては、三木健氏が大正期の三大炭鉱として論じている(＊２)。しかし、四つ目の波上炭鉱に関してはほとんど知られていない。

西表島北岸、船浦湾のシザバナレ（東の崎）を曲がったヤドゥルガン一帯は波上炭鉱の石炭積み出しのため、埋め立てた場所であった(＊３）と『竹富島町史 第六巻 鳩間島』はいう。現在、波上には石炭が落ちていて、貯炭場の痕跡がみられる。

では、石炭はどこから、掘り出したのだろうか。ヒナイサーラの滝周辺には石炭が落ちている。また、ヒナイサーラに登っていく坂やその上の道にも石炭が落ちている。炭鉱はヒナイサーラの滝の上にあったようである。坑口はまだ発見されていない。

波の上炭鉱で働いていた大城スミさん(＊４）は次のように語っている。

17歳の時、波の上炭鉱に働きにでました。17歳から18歳の頃でした。1922年（大正11）から23年（大正12）の頃だと思われます。朝、鳩間島からクリ舟で波上炭鉱の方に向かいました。島の女性たち10人も一緒でした。朝着くと、トロッコに乗り、帰りもトロッコで帰ったそうです。トロッコに乗れるのはその朝夕だけだったそうです。スミさんはカゴを持ち、カゴの中に石炭を入れ、カゴを頭に乗せ、石炭を下ろし、その往復を夕方まで行ない、夕方、クリ舟で鳩間島に帰った(＊５）といいます。

大城スミさんたち、鳩間島の女性たちはどこにクリ舟で着き、トロッコに乗ったのだろうか。波の上、シザバナレ、ヤドゥルガン一帯の積み出し地点まで、トロッコのための線路はあったのだろうか。波の上、シザバナレ、ヤドゥ

ルガンとヒナイサーラの間にはナダラ川、西田川が流れている。大城スミさんたちは、石炭をどことどこの間に運んだのだろうか。その往復がつらかったようだ。

かつて波の上炭鉱で父親が働いていたという、廖継思という台湾の方が三木健氏のもとを訪ねてきたそうだが、「現在の（当時の）研究状況では（波の上炭鉱の場所や状況については）わからない」と答えたとのこと。

波の上炭鉱の鉱主は誰だったか。大城スミさんが波の上炭鉱で働く前、『官報』では林熊徴・苑姜淶が1921年（大正10）に石炭試掘の申請をしている(＊６)。

林熊徴はその後も申請を続け、1933年（昭和８）まで申請および許可は続いた(＊７)。林熊徴は板橋林本源の当主で、1919年（大正８）設立の華南銀行の設立主導者に担ぎ出された台湾の実業家である(＊８)。

台湾の有力実業家が炭鉱の試掘調査を10年以上もしていたことはわかっている。また、波の上炭鉱に台湾労働者がいたことは廖継思氏の父親の事例からもわかる。

前述の三木健氏によると「波の上炭鉱が稼働していた大正期は、西表炭鉱の全盛期で、台湾資本の同炭鉱もそこに目をつけたが、西部の鉱山はすでに他社に押さえられ、このため波の上のような交通の不便なところに採掘したのだろう。炭坑労働者も台湾人だけでは足りず、地元から調達しようとしたがそれも十分にできず、鳩間の人にも口をかけたと思われる」と話している。

どうも台湾と関わりがありそうだが、資料が見つからない中、謎を秘める波の上炭鉱である。

［写真上・下］
西表島北海岸、シザバナレー（下離）付近の海岸。
（1987年、里井洋一撮影）

【参考文献】

＊１　『先島新報』大正８年11月15日付（『竹富町十一巻〈新聞集成Ⅱ〉』87頁）。
＊２　三木健『西表炭鉱概史』２頁参照。
＊３　『竹富島町史 第六巻 鳩間島編』69頁参照。
鳩間島の対岸である西表島北岸部に位置する地名の解説に、以下のような表記がみられる。
「ヤドゥルガン」には、「シザバナレー（下離）の先端をマーレー側に曲がった一帯。そこはナミノウエタンコー（波之上炭坑）が大正頃まで採炭していて、石炭の積み出しのために、原野の埋め立てを行なった所である。それ以前は、そこにスラバ（造船所）があったという。〈後略〉」とある。
「シザバナレー（下離）」には、「〈前略〉大正期には炭鉱が掘られた。」とある。
＊４　大城スミ。1905年（明治38）生。
＊５　1987年、西表島船浦の大城栄茂宅で里井洋一が聞き取り。
＊６　『竹富町史 第十巻 資料篇　近代４－官報にみる八重山』493～494頁参照。
＊７　『竹富町史 第十巻 資料篇　近代４－官報にみる八重山』546頁参照。
＊８　久末亮一「『華南銀行』の創設―台湾銀行の南進における『大華僑銀行』案の形成と結実―1912－1919」（『アジア経済　51－７』2010年）

波上抗探索記

安　里　　淳

まえがき

2021年12月４日、琉球大学名誉教授　里井洋一（※１）氏の呼び掛けにより集まった有志８名により、長年詳細が不明となっていた「波上炭坑」の探索を行った折、幸いにして坑口発見の栄誉に触れる事が出来た。

また、それについて文章にまとめていただけたらの言葉、世辞を真に受けただけかも知れないが、今回の発見には先人の書き残した手記も一役を担った事を踏まえ、記録作成の意欲に駆られたので、広報誌のかさ増しにでもお使いいただけたら幸いと思い、拙筆ながら作文する。

１．予想地点

そもそも、私は捜索に参加する予定は無かった。予定上都合が悪いというのが第一、また当てずっぽうで方々歩き回って探すというのは性分に合わないというのがその次。

だが、高山雄介（※２）氏をきっかけに大正時代の古地図（※３）を拝見して以降、「ひょとしたら見つかるかも知れない」という意識を強めていた。地図には鬚川滝からテドウ山への山道中に“せきたん”の文字。真下に鉱山マークと黒点が記してあった。

探索日３日前時点で予定の都合がつき参加が決まる。

しかし、地図にスケッチした程度の予想地点を当てにするのは心許ない。以下のデータをパソコンの画像ソフトを駆使し大正期の地図に重ね合わせた。

１．国土地理院２万５千分の１地図

２．GoogleMap 地図

３．1960年米軍撮影航空写真

作業は３枚分で半日ほどだったが、大正時代に航空測量がないのが恨めしい。

想像するに、海岸線、等高線に沿って踏査し製図したであろう苦労は物凄いものがあるが、現行の地図と比べれば山は歪み、川筋を読み違え、細部が曖昧なうえ、大正当時もっとも詳しい地図は５万分の１。

尺度の違う現行２万５千分の１地図の大きさを変え、歪ませてようやく重ねた時分には信用に足るものか不安になってくる。

それを繰り返すこと３枚、そして最後にその３枚を重ねると、どうにか同じ一つの尾根に集中した。

類似の地点を指した２点を１点にまとめ、最終的に予想地点は２か所に絞られた。

二つの地点の間は約200メートル。一日のうちに巡るのは難しくないと考えた。

２．坑口探索

探索日当日、前日より石垣島に滞在していた先述の里井氏をはじめとする一行計４名（※４）の来島を待ち、上原集落内にある村田行（※５）宅に集合したのが午前８時30分頃であった。北風により最寄り上原港着の便が欠航し、石垣島からの始発便で大原港を経由し、ようやく来た里井氏一行にとってはこれ以上ないスケージュールであるが、待たされる地元民側としては歯痒いもの。また夕刻の飛行機に合わせ

同じ行程をこなす事も時間配分に加えなければいけない。

時間が限られるとして手短に里井氏による探索主旨説明。インクライン（※６）、炭鉱に関する初見の資料を戴けたのは嬉しかった。

その後、マーレー川奥よりピナイサーラ滝上への登山道を進み、テドウ山とピナイサーラ滝上との分岐点に着いたのが午前11時近くであったかと思う。

事前に、痕跡（石炭片等）があるピナイ滝周辺を探索するグループと古地図より推測した未開地点を探索するグループとに分裂する事は打合せていたが、構成メンバーについては、高山氏が私に同行することが何となく決まっていた程度であり、居合わせた岸本望（※７）氏の同行はその場で急遽決まったことであった。

里井氏も古地図推測派に興味があるようだったが体力が求められると言うと遠慮した。あとから思えば正しい判断であった。

私、高山氏、岸本氏の３名は、私の先導で予想地点を目指し出発間際、残る片方のグループを引率する村田氏より

「古地図の印なんか適当なものだろう」

「そんなことより待ち合わせはどうする」

に対し、

「目的地に着いて、なにも見つからなければ直ぐに引き返してくる」

と返答した。

私としても足労に終わる可能性の方が高いと見込み、直ぐに戻ればもう片方のグループを探すには十分な時間があるだろうと考えたので、特に細かく決めずに別れた（※８）。探す方としてもその程度の意気込みだった。

３．道案内

私が企てた計画であり、私が主導しなければ始まらない。

道を外れれば、たちまち位置を失する西表島の密林。ＧＰＳ（※９）が使えなければこの計画が成り立たないことは明確。

電力消費を抑えるために電源を落としていたスマートフォンを起動し、地図アプリ（※10）を開く。なかなか起動しないスマートフォンのＧＰＳ機能に不安を感じるが、しばらくすると機能した。

位置も判り、地図データーも良し。あらかじめ入力してあった予想地点も確認できた。

先日からの脳内シミュレーションも幸い、テドウ山への分岐点から水平距離600メートル〈注意：標高ではない距離である〉山を登る必要があることは直ぐに理解できた。なるべく電力を温存しなければならない。速やかにスマートフォンの電源を完全に落とす。

「テドウの道を600メートル行きます」

と、同行者に伝え、もう一つのＧＰＳ機器であるバックトラック（※11）で分岐点をマーク（記憶）し、テドウ山への登山道を登る。

手元のバックトラックの距離計を確認しつつ移動。最初のほうは割とスムーズに距離が伸びたが、400メートル程進んだところから道が蛇行し、距離が稼げない。いらいらする。

ようやく、600メートル。もう一度スマートフォンを起動し、位置を確認する。

森林が濃くなった為か位置情報を表示する矢印が小刻みに揺れる。その様に不安を覚えながら方向を確認。

「92度。（水平距離）約200メートル」心の中に記憶するが、やはり方位は目安程度に捉えなければならないだろう。

バックトラックに新たな地点を記憶させる。

「こっちの方向。200メートル進みます」

両手を“前ならえ”で指し示す。人幅より正確な方向はわからない。

人並みよりは良いと思っている土地勘を駆使して案内役。なるべくまっすぐ前に進むが地形がそれを邪魔する。案内役としてなるべく先導しようとするが、難所にぶつかると同行の３人それぞれが通りやすい所に目処をつけ、前に進めた人に残りが随行する。

獣道の方が歩きやすく自然とそちらを選び歩

く。そのような密林を歩き続けようやく目的地である200メートル地点を目前にして、今度は急な下りの崖にぶつかった。季節外れで家主を失くしたスズメバチの大巣に肝を冷やしつつ山側を迂回し谷間に降りたところで、露出した地層があり、板を重ね上げたような砂岩の下層が黒光りしているのが見えた。

予想していなかった苦労の末連れてきた二人に、なんの成果も無く帰るのはなんとも申し訳ないと責任を感じつつあった私は「せめて石炭だけでも・・・」と、期待しつつ注視したが、細く落ちる水に濡れた岩石が藻で黒光りしているだけであって、心底がっかりした。

バックトラックの示す距離約200メートル。スマートフォンを起動し位置を確認する。

薄々感づいてはいたが、やはり地図で見ていた地形そのものであった。

だが、何もない。

４．予想地点探索

休憩しつつ手短に、目の前の尾根を周回しつつ、標高250メートル付近まで登る。できれば一周したいという予定計画を説明する。

岸本氏が、

「何か見つけたら、『大発見やー』（※12）って言います。」

と話した。

折しも先頃亡くなった笑福亭仁鶴（※12）の追悼番組でこの台詞を聞いて以来、マイ流行語なのだという。

休憩後、谷間を下りつつ探索中

「大発見やー」

親指サイズの石炭片を岸本氏が見つけた。

テドウ山方面での石炭確認は前例を聞かないので確かな成果が期待でき、探索継続の後押しとなった。

痕跡を探しながら谷間を下りつつ、そろそろ反対斜面に出るため尾根を周り込もうとした頃。

最初に声を挙げたのは高山氏であったと思うが、

「エッ、ゴロゴロしてますよッ」

と、拳ぐらいのサイズの石炭を４畳ほどの地表から５個位拾い集めた。

なかなかの収穫を見て、“何かあれば同じ地点にたどり着けるようにしておけ”との指示を思い出す。

スマートフォンの電源を入れ地図アプリを起動するが、なかなかＧＰＳ情報を取得できない。岸本氏が尾根を回り込むように移動を続けるが、地点情報を記録するまで移動する訳にはいかず焦りを覚えるなか

「大発見やー」

２度目の発見コール。

続けて、

「道だッ」

と言う。

岸本氏に続く高山氏も合わせ

「道だッ道だ！」

と興奮混じりの会話が耳に入る。

「エッ、ちょっ・・見たい！」

思わず口を衝くが、動く訳にもいかない私は記録を終え、一寸遅れて進んでみると確かに道である。尾根を切り取るように道がある［写真１］。

小さい尾根とは言え側面の高さは背丈を超え２メートル弱（※13）、道幅２メートル程（※13）。

これは真に大発見と地図アプリで位置を記録する。電源を切らずにいたので時間短縮だが、ＧＰＳの調子が悪いのでスマートフォンを振り振り（※14）しつつ、記録に少し時間を取られる。

切り抜きから少し進み、曲がった先の反対側斜面に沿って道が続くのを見る。よくも百年残ったものだと感動する。

斜面を直角三角形に切り取ったような道を進む。道幅だいたい１～２メートル、崩れた部分で0.5メートル以下（※13)。シダ、灌木が茂るが、山側には土塀のように垂直な面が残る部分も多く人工的な雰囲気があった［写真２]。

道を塞ぐ植物、倒木をかき分け、途中何度か土砂崩れで道が消え、続く道を探す手間があったが何もない所を進むよりは良いだろうと道に沿う。

道中、石炭片などの遺物が見当たらないことから炭坑関連の道なのか不安を生じたが、唯一高山氏が見つけた陶器片（※15）に希望を見出し、他に頼るものもないので先を急いだ。

15～20分ほど進んだか、谷側に石炭片が散乱しているのに気が付いた。

山側からの滑落と想像し、山肌を見れば坑口らしき凹みがあり、もしかしたら坑口ではないか？否これでほぼ確定であると想像逞しくそう思った。

高山氏も人為的なものに見えると言い、兎に角も写真を撮ろう。記録を取ろうと動いていたところ

「大発見やー」

先に進んだ岸本氏から３度目の発見コール。

またもや地点記録に時間を取られたが、少し遅れて見てみれば、大きい大きい。

百年の年月に埋もれた僅かな痕跡も見逃さないと意気込んでいた考えが馬鹿みたいに思えるのとまるで小物に気を取られているうちに大物を取られた体で二重に衝撃だったが、第一発見者となった岸本氏を称えつつ、三人共々顔がほころぶ。

岸本氏には、死んだ笑福亭の加護でもあったのだろうか。この日の大きな発見を総攫いである。

ほぼ確実に坑口なのを喜びつつ、高山氏が写真撮影、私は地点記録に努め、機材トラブルに備えるべく、念のため手書きでも座標を記録した。

５．坑口到達

ようやく坑口到達。

坑口は斜面にあったが、滑り落ちた土砂のせいか横に見るというよりは、土山の上から見下ろす形であった。

深さ２メートル強、開口部幅２メートル弱。深さ１メートルほど（※13）でひと一人分程度まで細くなっていた。

私は、坑口だけしか意識せず俯瞰する余裕まではなかったが、高山氏によると逆ハの字型に斜面を切り取っていたと言う。

標高は約210メートル（※16)。

坑口を覗き込んでみれば、背丈に近い深さであり降りられそうである［写真３]。

ここで懐中電灯の類を一切用意していなかった不備に気が付き、我が身を祟ったが少し思考

を巡らせばスマートフォンにも懐中電灯の機能が付いている。たどり着けたのだからＧＰＳはもはや重要ではない。電力は喰うが良いだろうと勘案したが、降りようとする身振りで他の二人に“何かあれば困るから”とやんわり止められた。

言われると、確かに出っ張りの少ない粘土質の斜面で滑り登れなくなるのも想像できたので、そこで止めにする。

坑口付近でまごまごする我が身が人目を惹いたのか、

「淳君。破れてるね。」

岸本氏に指摘され見てみると、あらゝゝゴム引きの長靴に大きく裂けるような穴ができていた。永く世話になっていたが今回の荒行は靴にとってもハードだった様だ。

「なに。こんな二千円ぐらい(の損失)・・・。」

現金な表現で申し訳ないが、この日の私はその損失が気にならぬほどの充足感に満ちていた。

私の知らぬところで待ち合わせの時間も決まっていたらしく、もはや大幅に遅れているということで探索終了。速やかに帰ることにし、岸本氏の提案で谷間のピナイ川支流を下ることにした。

坑口跡直下、谷間を通る川に屑炭でも投げ込んだのか。しばらく川底に無数の石炭片が散らばっていた。

６．復路

先述の支流を下る。途中見栄えの良い小滝に遭遇、岸本氏そこで初めて自前のカメラを取り出し、

「今日、初めてカメラを出した。」

言いつつ滝をカメラで撮る姿で、炭鉱史よりも自然への興味が強いことが発覚する。

その点が、小よりも大を見る発見につながったのか、ビギナーズラックを生じたのかは判らぬが、先の一言には笑った。

なおも支流を下る途中、足元に細い生き物が。

私はヘビと一括りに見て素通りしようとしたが、高山氏と岸本氏が見るも稀なセダカヘビだと撮影に徹する。だが、この幸運に岸本氏の強運も尽きたのか。岩をも貫かんばかりの細い急流に足を置く瀬も無く、支流下りは困難となった。

二つ程あった急流は、岸本氏の先導で山側を迂回しつつ進んだが、これが続くとなるとくたびれる。ピナイ川本流まで200メートル程度のところでピナイ滝寄りの山に渡れたので山を進んだ。

山中で炭鉱時代の道に再度遭遇し、なるべく選んで通ろうとしたのだが、密林に埋もれ諦めた後、獣道を行けば小高い尾根山の上に出た。そこで休憩中、携帯電話の電波が繋がることに気が付き、ピナイ滝周辺グループ村田氏に連絡。電波状況の悪いなか高山氏との通話には喜びが醸し出た。

休憩中にＧＰＳで位置を確認すると、山を下ればピナイ川本流がある地点だった。

斜面を下り、本流を渡ると観光利用の山道に入った。ピナイ滝直前の乱雑にあるピンクリボンの道案内に翻弄されつつも、滝上川原にたどり着き、ほどなくしてピナイ滝周辺グループと合流した。

合流時、

「見つかるとは思っていなかった」

の声はさておき、

落ち着き座ることもせず、高山氏の撮影した写真を皆さん総立ちでデジタルカメラの表示画面に見入る。

しばしの報告会の後で、いまだ摂っていなかった昼食を食べた。時刻は午後２時に近かったと思う。

７．ピナイ滝周辺

ピナイ滝周辺を探索した主催者里井氏を含むグループの成果もなかなか面白いものがあった。

石炭散らばる斜面上の平地付近でコンクリート製礎石のような遺構をはじめ、陶器片にビール瓶。

付近にある小川周辺湿地では石炭も多く、収集し袋に詰めたが、崖下に落としたと残念そうな里井氏であるが、危うく自身も共に身投げせんばかりであったと後になって聞く。

なお、コンクリート遺物については手記（※6）にあるインクラインの構成材の一部ではないかと、現時点での可能性が示唆された。

合流後、全員でピナイ川汽水域上流の川際まで下山し、痕跡を探索し続ける。

私は手元の古地図写しと、現行地図の写し、スマートフォンの地図アプリを現場地形と見比べつつ動き回るが、最初見当違いで奥に行き過ぎた。修正を重ね大正期の登山ルートと同一と思われる地点にたどり着く。人のいたずら程度にではあるが石を積み重ねたものと、少し散らばる石炭片に期待が持てる。

登山ルートをたどると、ジグザグに進む現在の道よりは傾斜がつくが登れないことはない。だが、その頃には引き揚げムードが小さく聞こえる会話にのって伝わってきたので、引き返した。

戻ると、小さな探索隊終了式を終えたところであった。

探索隊全体としても散らばる石炭片から、川際まで石炭を運んだことは間違いないという考えのようだ。だがこの先が船なのか何なのかを判断する根拠は見つからなかった。

8．帰り道

なるべく急ぎ帰ったが、行進の列中、里井氏と前後接していたので考察をまとめつつ歩いた。

「坑口から斜面上の平地までどの位の時間で歩けるか？」

里井氏の問いに対し、

「道が良ければ10分位（※17）で足りるんじゃないか。」

と答え、

「鳩間島から来た女性達（※18）でどのくらいの石炭を運べると思うか。」

の問いに対して

「昔の人は凄いですからね（※19）。100・・は言い過ぎか、80kg（※20）にしておきましょうか。10人だと一往復800kgですね。」

と、答え、それを仮として思案し、以下にまとまった。

1．朝、鳩間島より船で来た女性達はピナイ川上流で下船。
2．目の前の斜面設置のインクラインでトロッコに乗り込み、斜面上の平地まで移動する。
3．坑口から斜面上の平地まで、石炭を運び往復する。運搬員10人の場合、1往復：800kg。10往復：８トン／１日（※21）
4．日中の労働後、インクラインを利用して川岸まで下山。船で帰る。

まとめた後で、

里井氏は、証言（※18）との整合性は執れることを認めたが、証拠となる遺構などが発見されない限り、この仮説は意味をなさないと指摘。

その為にも一層の調査を進めたいと言い、今回の坑口発見を期に地質関係の研究者にも声掛けして再度来島したいという里井氏の意思が感じられた。

最後にマーレー川上流駐車場で集まり、連絡先交換としばし談笑の最中、里井氏より金一萬の進呈があり、坑口発見の報奨金としてありがたく頂戴した。

特に、2021年（令和３）末燃料費高騰の折に西表東部地区より遠路はるばる無償奉仕覚悟で駆けつけてくれた岸本氏に、少ない報酬ではあったが配分できたのは何よりだった。

里井氏一行を見送ったあと、地元民４人は、村田宅で一時間程度談笑。

高山氏が収穫した石炭を拡げ、また撮影した写真を閲覧しつつ、今回の体験とこれからの調査への期待をお喋りした。

あとがき

急ぎ帰った里井氏から悪い連絡はなく、どうやら無事夕刻の飛行機には間に合ったと思われる。

私は、坑口発見の晩には地図上に地点を整理した。実際そんなことはなかったが、何かの拍子にスマートフォンに貯めた地点データーが消えるのを恐れた。

翌日、脚部を持ち上げる筋肉が特に痛む。

６日には、高山氏の新たな仮説（※22）を解説地図付きでメールが届き、痕跡探しに行きたいとの内容だった。

この様子だと替えの長靴を入手する時間も惜しいと、修理を考え始めた。その方が安いと貧乏性が頭をもたげる。

岸本氏と「大発見やー！」は我が家の流行語にもなりそうだと話したのを思い出し、意識して使ってみようかと思ったが、普段の生活では出番のない台詞である。日常生活には“大”どころかただの発見もないものだと気が付いた。

やはり、実際に大発見がある場だからこそ多用ができたのだろう。

今回の探索中、ピナイ滝上流には炭坑関連の屋敷跡があるやら、材木搬出のために牛が通った“牛道”なる山道について信憑性はともかく証言、伝承を村田氏が収集した。

ピナイ川周辺の土地は、なかなか多くの発見の可能性を孕む包括力があるらしい。

新たな「大発見やー！」の声がピナイ川の谷間に響く事に期待しつつ締めくくりとする。

2021年12月７日記

【注記】

※１：里井洋一／琉球大学名誉教授／竹富町史編集委員会副委員長。かつて、船浦中学校教員として西表島に在住中、生徒と共に“船浦スラ所”遺跡を調査。教育委員会による発掘調査への先鞭をつける。西表島西部地区の郷土史にも造詣が深い。

※２：高山雄介／認定ＮＰＯ法人トラ・ゾウ保護基金西表支部　支部長／上原地区在住。今回の探索計画において多くの資料情報を提供してくれた。波上炭坑への興味の強さでいえば、随一であろう。

※３：古地図
地域名　　日本
記　号　　先島群島十四号
図幅名　　西表島北部
縮　尺　　１：50,000
測量機関国　日本
測量機関　　陸地測量部・参謀本部
測量時期（修正含む）　大正10年測圖
発行時期　　昭和11年発行
この地図がなければ今回の成功はあり得なかった。
東北大学附属図書館／理学部地理学教室、外邦図デジタルアーカイブ作成委員会の活動には敬服するところである。

※４：里井氏ほか参加者
宮里満男（野底小学校校長）／森亮介（西表小学校教員）／米盛恭子（竹富町教育委員会町史編集係）

※５：村田行／観光業（カヌー・トレッキング）経営／上原地区在住。ピナイ川周辺を利用し、カヌー・トレッキングガイド業を営む。里井氏にとっては船浦中学校教員として在島時からの友人。著者の養父にあたる。

※６：インクライン
インクラインとはケーブルカーの一種。斜面に軌道を敷き、斜面頂上の巻き上げ機でトロッコを引き揚げるだけでも成立する、範囲の広い言葉だと捉えている。小底貫一氏の手記、『イリオモテ山猫の呟き―山島男の半生あぶり出し』130頁参照。
《西表島一周旅行の歌》12番の歌詞中に上り下りの“インクライン”なる記述があり、波上炭鉱におけるインクライン存在の可能性が生じた。

※７：岸本望／観光業（カヌー・トレッキング）・イノシシ漁師／豊原地区在住。素晴らしい強運と健脚の持ち主。また山歩きに慣れており遅れることはあり得なかった。この度の功労者である。

※８：私の勘違いであることが後ほど分かった。

※９：ＧＰＳ
正式名称グローバル・ポジショニング・システム、世界中どこにいても緯度経度が把握できる。湾岸戦争時、不可能と言われていた案内人

無しでの砂漠地帯行軍を成功させた軍事技術であったが、後に民間にも技術開放されると急速に普及。その機能の低価格化が進み、まさに文明の利器としてこの度利用。

※10：地図アプリ
スマートフォンに搭載されているＧＰＳ機能と電子地図データを統合し、表示地図上に現在地・方位を示す事ができるアプリケーション。ＧＰＳ機能付きスマートフォンの普及に対し、実用的な電子地図アプリの進歩普及が遅れていたが、この度使用した「ジオグラフィカ(Geographica)」はデータ通信のない状態でも機能する優秀なアプリである。

※11：バックトラック
商品名 Bushnell 製バックトラックＧ２(BackTrackG２)ＧＰＳナビゲーター。３地点のＧＰＳ情報を記録し､その地点に戻ることが出来る。どれだけ離れたかもメートル表示できる｡機能の割に高価だったが、たびたび役立っている。

※12：三代目笑福亭仁鶴
1960年代後半から70年代前半にかけて、深夜ラジオ番組の出演で当時の若者層から絶大な人気を博し、番組中に発した「どんなんかな～」で一気にブレイク。
関西圏出身の岸本氏がたびたび発した「大発見やー」も仁鶴のネタのひとつ。先立つこと2021年（令和３）８月に亡くなった際、放送の追悼ラジオ番組で声を聴いて以来、岸本氏は我が子に煙たがられるほど使っているらしい。

※13：長さについて
何度も指摘することになるが、実測値では無い。記憶からの値である。

※14：振り振り
ＧＰＳ機器全般に云えることだが、たいてい大きく水平に∞を描くようにＧＰＳ機器を動かすと､ＧＰＳ観測精度が向上する｡この度はスマートフォンであったが、効果があるようだったので多用した。

※15：陶器片
この探索より数日前、村田・高山両氏が伊武田崎にある波上炭坑貯炭場跡より収集してきた陶器片に類似していることを高山氏が述べたので、実に励みとなった。

※16：標高について
持ち帰った位置情報から推定。
※17：移動時間について
10分は過剰であったが、20分。最悪30分間の内には収まるのではないかと思う。

※18：鳩間島女性の証言
里井氏が過去に証言を聴取した、既に亡き鳩間島女性大城スミ氏の証言。彼女の証言によると、朝は小船で同島の女性10人と共に炭坑へ、朝夕だけトロッコに乗る、石炭入りの籠を頭に載せて運ぶ作業を夕方まで行う。夕方、船で帰島する。

※19：昔の人の凄さ
例えば、200kgのドラム缶を運ぶ人が何人もいた。常に裸足で暮らしているから靴底のように皮が厚く、鋭利なサンゴだらけの浅瀬を走り回れた。等の荒唐無稽な話をたびたび見聞きするが、時々テレビで見る発展途上国の労働者や住民のビックリ映像を見ると無碍にする訳にもゆかぬ気がしてくる。

※20：運搬重量について
人間一人が何kgのものを運べるのか？というのは面白い問題である。
類似例の記録を求めるが､「名護市底仁屋で大人なら150斤(90kg)の薪を運ぶのは普通だ」と言う証言に一喜したかと思えば、奄美瀬戸内町の､「男は一俵15kgの炭俵を一つしか担げないが女性なら二つ（30kg)持てる」の証言に一憂する具合で良いものがないと、思案の最中。バングラディシュのレンガ運びをテレビで視たのを思い出す。試しにインターネットで調べつつ以下にまとめた。
レンガ一個2.6～2.8kg（仮に平均2.7とする）
子 供８～10個（21～27kg)、大 人10～20個（27～54kg）を、頭に載せて運搬する。そのことから40kgと答えたほうが適切であったかも知れない。

※21：一日の運搬量考察
先の項の続きとして、
８個ずつ運ぶ子供が12時間で約1000個運搬。
一時間で83個、10分の１時間（６分）でほぼ８個。
６分で大人15個とすれば×10回で１時間分150個。12時間で1800個（4860kg)。
だが、今回の条件として、一往復50分と労働時間、午前８時から午後５時の９時間とすると、一日に10.8往復。
一人が40kg保持のうえ､10往復させると400kg。

ここで過去の各炭鉱の出炭量記録を見つつ、月産100トンと仮定し、日で割ると一日３トン弱は運びたいところである。“一人当たり400㎏／１日として10人いれば４トン／１日”で余裕があるが、考察の元となる例が労働者揃いもそろって頭骨が変形するといわれるほど苛烈な発展途上国のレンガ運びであるから、もっと人数に余裕を与えたほうが良いか、出炭が少なかったと見るか・・・まだまだ考察が稚拙であるといえる。

※22：高山氏の仮説
《西表島一周旅行の歌》の歌詞から推理するに、貯炭場跡のある伊武田崎付近にインクラインがなければ、登場地名の順番が合わないと言うもの。なるべく早く周辺探索をしなければいけないと私も思う。

【執筆者プロフィール】

安里淳（あさとじゅん）
1993年（平成５）生まれ、西表島上原出身。
養父・村田行の膨大な蔵書に囲まれ育った為か、郷土史の覚えが良く郷土史への興味関心が高かった。炭坑探索に参加したきっかけも、文献情報の提供によるところではあったが、そもそも里井氏の発案が無ければ今回の成果は無かった。また、教育委員会町史編集係のみなさんには、校正・編集の面でサポートしていただいた上での執筆であった。今後も機会があれば郷土史の充実に貢献したいとも考えている。

【特記事項】
◆「炭坑」の表記について
波上炭鉱の表記に関して、『先島新報』には「波上炭鉱」とあるので里井氏の原稿では「炭鉱」とした。ただし、炭鉱の入り口は「坑口」に。なお、三木健著『西表炭坑概史』では、「炭坑」と表記している。

◆「波上炭坑」「波上炭鉱」「波ノ上」「波の上」に関して、文献によって表記がまちまちである。
本稿では、里井、安里氏に提出いただいた原稿の表記のママ、里井氏原稿では「波の上鉱」「炭鉱」、安里氏原稿では「波上坑」「炭坑」とした。

◆「ヒナイサーラ」「ピナイサーラ」の表記について
文献や個人によって「ヒナイサーラ」「ピナイサーラ」ということもある。提出原稿により、里井氏原稿では「ヒナイ」安里氏原稿では「ピナイ」とした。
『竹富町史第六巻鳩間島』の「ピナイサーラ（ピナイ滝）」には、「ピナイ川の上流にある滝」とある。

◆スタンフォード研究所『西表島の資源及び経済の潜在力に関する調査　報告書』（1960年）296、297頁に「第８表　西表炭の分析」として、表の13、14番目に「波ノ上」が登場する。これは1954年三井鉱山株式会社が調査した内容である。また、324頁には地図があり、「波の上」の場所が示されている。その場所はピナイサーラ付近ではなく、ナダラ川北付近を示している。

◆編集中の『竹富町史 第八巻 西表島』〈上〉のコラムとして提出された、里井洋一「波の上炭鉱のなぞ」を、『町史だより』〈第49号〉掲載用に整えた。

望　郷　鳩　間　島

吉　川　安　一

2014年

1　豊年祭の大旗とガーリ頭

鳩間島では、旧暦５月の壬の日にスクマ（初穂祭り）がある。この日の晩に豊年祭で奏する笛が吹かれるが、その笛の音は村人に「プールヌシキ」（豊年祭の時節）を知らせる。そのおよそ１カ月後、豊年祭は壬の日から３日間にわたってクライマックスを迎える。初日にユードゥーシ（夜通し）の祈願があり、第２日目がトーピン（当日）、第３日目がシナピキヌピン（綱引きの日）である。

(1)　大旗の由来

鳩間島の豊年祭は、大旗（ウフバタ）を「五穀豊穣」「豊漁」「子孫繁栄」「無病息災」などの象徴として、「歌で始まり歌で終わる」という特徴がある。大旗は「マブルシュ」（「守る主」、守護神）の象徴だという古老もいる。サカサ（神司）たちも大旗をマブルシュとして拝み座しているという。それゆえ、神聖なサンシキ（桟敷）では、マブルシュの大旗を背にして、奉納舞踊や棒術を演じているといえる。

旗頭、頭は一般的な呼称であるが、鳩間島の豊年祭で大旗というと、第三者が儀礼的に敬意を表すときに用いる総称といえる。大旗のうち、ユーガシラ（世頭）は西村の旗頭が行動するときに用いる呼称である。また、トゥムガシラ（伴頭）は東村の旗頭が行動するときの呼称である。

ところで、大旗はトゥニムトゥ（宗家）が所有することになっており、東村は友利家、西村は東里家が管理している。慶田城マカトゥによると、年代は定かでないが、東里家は大旗２基と弥勒（ミルク）面を所有していた。1843年（天保14）ごろ、その２基の大旗うち、１基を友人の友利家に譲渡したという。友利家はそのお礼として、友利多呂所有の田地（竹富町字高那北ヨシケラ39番地）の４反１畝７歩を、1909年（明治42）６月８日に西原伊久津の所有地（字鳩間52番地）として名義変更した。その後、西原家の田地（字上原船浦の野崎田（ノザキダ））と対等な面積を友利家と交換している。それから現在にいたるまで、大旗は豊年祭に登場し、東西両村を象徴するようになった。

豊年祭の当日（トーピン）、大旗の大小の旗字のうち、西村の小旗には「西村」、大旗には「瑞穂」の文字が記されている。また、東村の小旗には「東村」、大旗には「祈豊」の文字が記されている。綱引の日の大旗には両村ともに「五風十雨」の文字を記すことになっている。

大旗のデザインをひとつひとつ正確に意味づけることは難しいが、東村と西村のイメージはおおむね対照をなしている。

例えば、東村が鎌、西村が鍬を象ったものだといわれている。また、東村、西村の大旗には男女の身体的な特徴が表われているとか、東村は狩猟文化で西村は農耕文化を象徴していると意味づけることもできる。

(2)　ガーリ頭

豊年祭の綱引の日には、東西両村のほか、各

団体が創意工夫を施した、ガーリ頭も登場した。子どもたちの作るガーリ頭も参加した。ガーリ頭の形態は、円形、梅の花、六角形など、さまざまであった。

カツオ工場の頭は、大きなカツオを象ったもので、カツオ漁の繁栄を象徴していた。農業団体のガーリ頭は、大きな木製の鍬、鎌に農作物のサトウキビなどが加えられた簡素なものであった。

綱引が終了した後は、各村のガーリ頭や団体の頭に火を灯し、それを先頭に気勢をあげながら、元サカサ宅をはじめ、各家庭をまわった。

2　豊年祭のパーレー

2013年

当日に行なわれるパーレー(爬竜船競漕)は、イダフニ(クリ舟)を漕いで勝敗を決する儀式競技である。この儀式競技について、ハーリー、ハーレーと呼ぶ地域もある。沖縄本島や離島も含め漁業産業と関係の深い集落では、年中行事の一つとして旧５月４日にハーレーが行われる。

鳩間島ではパーレーと呼称するが、豊年祭の当日（トービン）に東村と西村の競漕というかたちで行なわれる。奉納舞踊や棒術の演目が桟敷で終了すると、大旗を先頭に人々は、銅鑼、太鼓を打ち鳴らし掛け声を掛け合いながら前浜のパーレー会場へ移動する。

パーレー舟の漕ぎ手は、イチバンヤク（漕ぎ手の先頭の一番櫂）をはじめ、10人の漕ぎ手(２人１組で５組)、トゥムヤク（船頭）の計12人で構成される。スタートの体勢を海上で前荷か後荷かのバランスを整えながら待機する。漕ぎ手たちは《ユークイジラマ》をうたって世（ユー、豊饒）を乞い求める。

ぱとぅまゆーぬ　ヨーホー
（鳩間世が　ヨーホー）
とぅむりゆーぬ　なうらば
（友利世が稔ると）
ヨーホ　スイナウレ
（ヨーホ　スイナウレ）
（以下、省略）

ユークイ（世乞い）儀式を終えると同時にスタートする。沖合300mほどには、折り返し地点を表す旗を立てた浮きが設置されている。その標識を回りながら旗を倒し、スタートの地点に先に戻り着いたパーレー舟の村が優勝の盃を賜る。護岸で正座されているサカサたちの前へ、優勝した村の一番櫂が、ヤク（櫂）を持って階段を走り上り、サカサに世（豊饒）を報告するのである。

パーレーの競争中、浜には世頭、伴頭が固定され、海辺ではブドゥルシンカ（踊り人数）の女性、老女や村人たちが、時には海水に浸かりながら必死になって応援する。銅鑼、小太鼓を打ち鳴らし、サジ（手巾、タオル）を振りながら、世果報（ユガフ）（豊饒）をもたらすパーレー舟を招き迎えようとする。

パーレーの勝敗を決した後、浜辺では次の《ユーアギジラマ》が歌われる。

一、いんすくぬ　ヨーホー
（海の底の　ヨーホー）
まぶるしゅー
（守る主〈守護神〉）
まいぬぱまぬ　ヨーホー
（前の浜の　ヨーホー）
うやがみ
（親神〈祖先神〉）
二、ばがぱとぅまに　ヨーホー
（我が鳩間島に　ヨーホー）

あがりょうり
　（上がって下さい）
くりとぅむりに　ヨーホー
　（これ友利御嶽に　ヨーホー）
うつりょうり
　（移って下さい）

ここには豊かな世（豊穣）を乞い願う意味をよみとることができるが、そこには海の幸、つまり、漁獲豊漁と航海安全の予祝を感謝するねらいも込められていると思われる。

また、鳩間島に伝わる民話を参考にすると、パーレーを次のように意義付けすることもできる。

鳩間島の南対岸の西表島にはピナイ村があった。その村落の中にはピナイ御嶽が建立されていた。ピナイ村は、降雨と肥沃の土地に恵まれ農作物が豊穣であった。鳩間島の人々は、ピナイ村の御嶽の香炉の灰を島に分け移し、ピナイ御嶽を建てることによって、ピナイ村と同様に五穀豊穣の村づくりが実現するのではないかと考えた。島人たちは２艘のイダフニを繰り出し、西表島のピナイ御嶽の香炉の灰をこっそり持ち出し、ピナイ村の人々に気づかれないようにと力の限り櫂を漕ぎ香炉の灰を持ち帰ったという。

鳩間島でもピナイ御嶽が建立され果報の村になった。ピナイ村のピナイ御嶽の香炉の灰を２艘のイダフニで力の限り櫂を漕ぎ、香炉の灰を分け持ち帰った時の様子を再現したのがパーレー行事である。

その他に、海の底の竜神を迎えにいくパーレーフニは、舟そのものを２頭の竜とみなして、その竜が沖から海の幸と降雨と五穀豊穣をもたらしにやってくるとの考えもある。

パーレー儀式が終わると、両村の大旗（世頭、伴頭）を先頭に、漕ぎ手たちは桟敷に戻り《サンシキの唄》をうたい、西村と東村の旗頭が出会うアイザムトゥの場では《アイザムトゥの唄》をうたって、当日総ての儀式は終わる。

３　弥勒加那志の由来

寄合幸は、鳩間島の弥勒加那志（未来に出現し、衆生を救う神）について、母親の通事モウシが次のように語ったという。

ミルクは元々、東里家の裏座に安置保管されていた。当時の役人が強制的でなく皆さんで拝みましょうといって村人にも解放したので村人も拝んだ。その後、35番地のミルク家でミルクは安置保管され、最近まで拝んだ。

このように、弥勒の面は、元々東里家が管理したと言われている。その証拠として、豊年祭のパーレー行事が終了すると、同時に神司は直ちに東里家に赴き、全員正装で御先祖様に拝礼する。その時の口上は、旗頭の借用でなく、「ミルクの面を貸して下さいまして、ありがとうございました」というお礼の言葉である。

弥勒面の製作については、花城茂男の祖先が彫刻されたという記述が系図にみられるという。弥勒面の素材は、楠材が用いられている。現在の弥勒面は明治以前に再製作されたと思われる。製作者は、大城家、石垣市の花城方も加わり仕上げられたと伝えられている。弥勒面のモデルは大工家の女性で、大工家は島一番の美人揃いの家系だと言われている。

大田裕（旧上里ウナリ）の祖母は、大工家の出であり、結願祭の時は必ず弥勒行列を見たいと言われた。大工家の女性を見て造られたという

2014年

弥勒に対面したくなるのも自然な感情であろう。本人はミルクヌアマイ(弥勒の舞)を見終わると､老体ながら友利御嶽から東村の人々が通る悪路を登りきって､ただちに家に戻ったという。

戦前の弥勒加那志の衣裳の色は青色（空色）であった。戦争中の保管状態が悪く、それは使用不能となった。戦後の衣裳は、婦人会の協力によってチョマ(苧麻、ブー)で織り､黒色に染め完成させた｡それで衣装を縫製して使用した。

1946年（昭和21）６月吉日、戦前の衣裳と同様の衣装を製作するために、調査研究が行なわれた｡その結果、青色(空色)の衣裳に決定した。

2009年（平成21）６月吉日、弥勒衣裳一式が新調され、発起人の東里耀吉、友利英雄、屋嘉武雄、寄合富、田代好子、鳩間ふじ子の６人から公民館に寄進された。

豊年祭の当日、弥勒加那志は、小底家で正装に整え、随伴する者「ミルクヌッファ」（弥勒の子ども）も同所で出演に備えることになっている。そのときに衣裳や五穀を盛った籠、小道具などのお化粧などが調えられる。

現在は、弥勒の御面も衣裳も公民館が維持管理している。

４　獅子の由来

鳩間島の獅子舞は、旧盆のナカヌピー〈中の日〉(旧暦７月15日)、ウクリヌピン〈送りの日〉（旧暦16日）の両日に行われる。満月、十六夜の月夜に舞う獅子は、ある時はおとなしくある時は荒々しい振る舞いを演じた。生き物の獅子同然の感であった。幼子たちは獅子の振る舞いを観て、怖くて逃げ出す子や泣く子もいた。獅子舞は２人１組で演じられた。

獅子のシダシー（お化粧、装飾）は、15日の午後から各村で青年団の関係者が集まって行った。シーシヌキン（獅子の衣裳）は、乾燥した芭蕉や月桃の繊維で作られた。衣装を新調するときは、青年団が半年前から、南対岸の西表島に渡り、芭蕉や月桃を持ち帰り、それを叩いて荒い繊維にし、それを乾燥させて用いた。新しい衣裳は、香ばしい香りが漂っていた。

獅子頭については、次のような伝承がある。

加治工次郎によると、琉球王国時代、首里城建築のため上覇した大城家の者が、首里城が完成して鳩間島に帰るとき、その功績が認められて姓を大工に改姓した。彼は沖縄滞在中、獅子の頭面を見て、鳩間に帰郷後、西村の雌獅子を新調製作したという。

また、東村の獅子頭は、クメー（小浜家、８番地）とアマセー（小浜家、６番地)、ユレー（寄合家、545番地）の３家の古老が共同で製作した。材料は巨大なグジキー（デイゴ）の幹が用いられた。西村の雌獅子を参考にして、東村は雄獅子を製作した。東村の獅子頭の保管はクメーで行われた。西村の獅子頭は大工定市家が主体として製作され保管している。

シーシマーシ（獅子舞）の最初は、獅子を保管している東村のクメー（小浜家）や、西村のダイケー(大工家)の仏前の中庭で演じられた。その後、東村では、製作者の寄合家、小浜家の順で行われた。その後、一般家庭の先祖の仏前の庭で演じられた。

シーシマーシは､獅子を先頭に､三線､銅鑼､太鼓、笛、歌い手の地謡方（楽団）と続き、その後にアンガマシンカ（踊り手）が続く。その一行は《道唄》をうたいながら、各家庭を夜明けまで回り先祖を供養をした。各家庭の中庭では、無蔵念仏歌《ニンブツァー》がうたわれ、それに合わせて若者のアンガマシンカが手にクバ扇や木の枝を持ち、浴衣、仮装の姿形で巻踊りを演じた。その後、獅子もアンガマ隊も民謡や歌謡曲に合わせて踊り狂った。中学生の製作した子獅子も参加して獅子舞が行われた。

お盆３日目の旧16日の最後の夜、午前２時過ぎに、東村、西村の両獅子が一堂に会し共同舞いを行い､子孫繁栄の願いを込めてズバシー(模擬セックスの性的行為､性交)の演技を行った。ダイケーとクメーは獅子が戻ってこないと、ソーランウヤプス（祖霊）を送ることができなかった。

1959年（昭和34）ごろ、獅子頭の老朽化が進

み、鳩間小中学校の校長を勤めておられた稲福定蔵校長に依頼して製作されたのが今日に至っている。

5　遠見台

現在は、交通機関の高速化、通信機能の高度化と迅速化が日々進歩している。人工衛星のレーダーによって、地球上の物体の位置確認が瞬時に出来る時代である。

1644年（寛永21）ごろ、琉球では、貢船、異国の船等の来島の時は、使者を遣わせたり、烽火（のろしび）、篝火（かがりび）をあげたりして、王府の中山に知らせた。そのころ、琉球へのスペイン艦隊、及び清艦隊の侵入の情報があったことから、1644年に海防監視体制が強化され、遠見台が設置された。それにより烽火制度が定められ、立火が行われた。

例えば、貢船１雙の場合は烽火１炬を燃やし、２艘の場合は烽火を２炬を焼き、異国船の場合は３炬を焚いた。八重山地方でも、当地の船、唐船漂着、大和船漂着、外国船漂着の時は、昼夜において烽火の立火が行われた。

「富川親方八重山島諸村公事帳」には、鳩間村の「東之盛」から小浜島の大岳に向かって立火をしたと記されている。そして烽火は、鳩間島→高那城→小浜島→竹富島→石垣島の蔵元へと順次伝えられた。

1703年(康熙42)に行政上、村に昇格した鳩間島村では番所が置かれた、「東之盛」の位置は、その番所の近くの東側の小高い岩森ではないかと推測される。現在の鳩間島コミュニティーセンターのトゥランパー(寅の方向、東北)に位置する所。つまり「東之盛」の位置は、元鳩間島郵便局前の小高い岩森の553番地のあたりだと考える。村番所の近くにある東之盛には、烽火の立火をする職人の火番仕口（火番守)がいたと思われる。一方において、烽火の転次の伝えを考えるとき、次のレーンを考えることもできる。

西表の外離→宇那利崎→鳩間島→高那城→小浜島→竹富島→石垣島の蔵元のレーンである。そのレーンに基づいて考えた場合、鳩間島では、遠見台の位置は、島の中央より南に位置し、島の一番高い標高33・4mの小高い中岡が好条件だといえる。中岡は、艦隊などが鳩間島の裏（北の沖）や前（南）の海原を通過した時、いち早く確認が出来て烽火を上げて連係できたものと考える。鳩間島での遠見台、及び烽火台は中岡に設置されていて、火番守が烽火の立火の務めをしていたとも思われる。

鳩間島での烽火は、古い時代においては、武士の家→ナーマ屋の屋敷→村番所の東北の東之森などと変遷があったのではないかと推測している。遠見台や烽火台がどのような構造をしていたかは詳細に記すことができない。

ところが実物や資料などを総合的に考えると、遠見台は、大正、昭和時代のころ、中岡に建てられている。遠見台の中には、円筒形のコンクート造りで、円の直径が約40㎝の塔が設置されていた。塔の高さは３m50㎝。３mの高さのところに鉄筋が横に出ていて、ランブなどを掛けるのに使用されていた。遠見台の中には、高さ30㎝に幅15㎝の真四角の石材に東西南北を表示した方位柱が設置されていた。

遠見台は、四季を通して四方を眺望できる場所に位置し、遠距離における情報の集取・発信の絶好のポイントである。そこは満天の星座やイカ釣り舟（イガメーフニ）の漁火を楽しむ場として、また男女のロマンスの語らいの場所でもあった。

中岡の遠見台で出征兵士を励ますため、次のような集いがあった。

1933年(昭和８)の冬、通事太郎(三郎の兄)が、海軍の一時休暇で帰省して、勤務に戻る際、西表白浜港から大阪商船の湖南丸か湖北丸かの何れかに乗船し、石垣島へ向かう途中、鳩間島の北の海上を通過した際、太郎は船の煙突の後ろの上甲板(デッキ)で黒外套を幾度となく振って、激励に集まった島人の見送りに答えた。見送る者は、母親モウシの他、多数の村人で「武運長久」を祈願し、日の丸の旗などを振って見送ったという。

通事太郎は、太平洋戦争で招集され、海南島

で1941年(昭和16)、名誉の戦死を遂げられた。

6　鳩間灯台の由来

鳩間島の北西海域は､イガメー(イカ釣り漁)には絶好の漁場である。1904年(明治36)ごろ、沖縄本島の糸満、久米島、宮古島などから、イカ漁を求めて漁業者が、鳩間島に来島した。多い時には100艘以上も操業した。その間、島人たちは、来島の漁業者からスルメの製造法などを修得し、イガヌバタガラス（イカの内臓の塩辛）やイガガラス（イカの塩漬け）などの海産物製品を完成した。秋季に実施される夜間のイカ漁は、特に島の位置確認や安全操業をするために､海の道標の灯台が不可欠であった｡当初、中岡(ナカムリ)に島の位置などを知らせるための櫓(やぐら)を組み立て、灯油ランプ、ガス灯を用いて光源を作り出し、灯台の役割を担わせた。維持管理費として賃金制・請負制・現物徴収制（当日の朝イカ現物を徴収）を試みていた。

1938年（昭和13）８月７日、鳩間字民を代表して慶田城勇、大工恵理、通事浩、大工定市、兼久英吉の５人が、竹富村長・山田武三と同伴で、八重山支庁の平良支庁長を訪ね、鳩間島の灯台建設の実現を、政府に強く求めるように陳情懇請したが実を結ぶことはなかった。

アジア・太平洋戦争の最中、既存の灯台や物見台は、軍事施設と間違えられるとのことで強制的に撤去された。

1945年（同20）の終戦後の島人の生活用品は、島外に求めなければならなかった。鳩間島海域への船舶の往来は慌ただしく、これにともなう海難事故が頻発難渋を極めた。そのため尊い人命や財物の損失はおびただしいものであった。事態を憂慮した、当時の郵便局長・田代浩は、船舶の安全航海を確保するために、1948年（同23）１月５日、島の中央部中岡（海抜34m）の頂上に、自力で３ｍの櫓を組立て、灯油八分ランプ３基灯を光源とする木製の仮灯台を設置した｡それは､闇夜の航海の道標として､戦後､鳩間島第一代目の航海安全を祈る灯台として点灯した。

２代目の灯台として、1948年（同23）９月30日、八重山水産会、石垣島、西表島、与那国島の漁業者や有志等の浄財で、高さ６ｍ、直径約70㎝の鉄筋コンクリート造りの灯台を設置した。８馬力の原動機を郵便局の敷地内に設置し、300W の灯台の照明を終夜点灯することになった。灯台守の吉川一雄、西加治工四郎が任務を果たした。

その後、鳩間灯台は、琉球政府海上保安庁へ引き継がれ、３代・４代目と改築変遷を辿り現在に至っている。

2013年

参考資料

●外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』（角川書店、1979年）

●『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ―八重山諸島の道―』（沖縄県教育委員会、1990年）

●『竹富町史　第６巻　鳩間島』(竹富町､2015年)

●加治工真市『鳩間方言辞典』(国立国語研究所、2020年)

※屋嘉武雄氏より貴重なお話をご教示賜り、ここに記して感謝の意を表します。

友利御嶽の扁額にみる鳩間与人について

田　代　浩　和

1　鳩間の村建てと村役人

鳩間の村建てと村役人について、『竹富町史 第六巻 鳩間島』第３章第２節２項、及び第５節５項をもとに要約する。鳩間村は、伝承によれば、西表島のヒナイ村からの６名の移住者によって建てられたといわれている。間切り制度が実施された1628年まで、鳩間村は「ひけ（ヒナイ）川村」と合わせて一村として扱われ、ヒナイ川村の与人等の役人の管轄下にあった。しかし、おそらく疫病の流行等によってヒナイ川村が衰微し廃村になったので、役人を引き上げ、古見地頭の所管に移された。

1646年の「正保国絵図」で鳩間村に関する記載があり、また1651年の鳩間・ひけ川二村の人口が70人であったことが記録されている。『八重山島由来記』には、友利御嶽（神名ヲトモリ）とともに、対岸の西表島から招いたと言い伝えられるヒナイ御嶽（神名フチコハラ）が記載され現存していることから、鳩間とヒナイ（鬚、比納）またはヒナイ川が歴史的に密接な関係にあったことがうかがわれる。

1703年４月３日付で、目差16人、与人16人、首里大屋子３人の連名で首里王府に対して要請を行い、その要請が実を結び、鳩間は1703年に村役人１人を置いて独立村となった。さらに、役人の増員を申請し、1704年に村役人が増員されて、二人体制（与人、目差各１名）で村を治めることになった。

2　友利御嶽の建物配置

鳩間島の古謡である《パトゥマムトゥジラマ》によると、ミントゥヌトゥシ（辛巳歳：1701年）からピチントゥヌトゥシ（癸未歳：1703年）にかけて鳩間村を建て、友利御嶽を建てたとなっている。舟屋儀佐真（鳩間儀佐眞）が創建したとされる、最も古い御嶽である友利御嶽（トゥムリウガン、またはウィヌウガン、ムトゥウガンともいう）が島の中央丘陵部（字鳩間福堂）に鎮座している。友利御嶽には、他の御嶽の香炉が置かれており、島の最高位にランクされる御嶽である。『琉球国由来記』（1713年）によれば、友利御嶽の祭神の神名はヲトモリ、御イベ名は大ザナルガネである。友利御嶽の配置は、南側にウボー（威部）と呼ばれる神木のある聖域があり、拝殿は南向きに建っている。ウボーに通ずる男性禁制の神の道の入口に屋根付きのパイディン(拝殿)があり、香炉が置かれている。（加治工2020年、220～221頁参照）

『球陽』によれば、友利御嶽のパイディンは、元々、瓦葺きであったが、残念ながら台風に倒されたため、その後は茅葺きに改造した。そのため修復に煩わされること度々で、しばしば夫役に悩まなくてはならなかった。そこで、兼久仁也は私費を投じて瓦によって、長さ９尺、横７尺の拝殿を覆った。その功績により、兼久仁也は1818（尚灝王15）年に首里王府より築登之座敷の位を賜った（『球陽』479頁、No.1591参照）。

パイディンの北面には、キチゴン（結願祭）で奉納舞踊のステージとなるメー（庭）が広がっている。メーから続く北にはウブヤー（母屋）が建っている。友利御嶽のウブヤーは、屋内に掲げられて

いる扁額によれば、1918年10月に新築された。友利御嶽の総代・小底真勢、及び比納御嶽の総代・仲底伊佐の時である。その新築祝いに長榮氏（字大川）の村山信充が馬の扁額を謹立（寄進）した（図２）。

母屋に掲げられている板記録によると、ウブヤーはその後、二度の改築が行われ、現在に至っている。一度目は、築後30年目の1948年11月に行われた。棟梁は平得三郎、区長は大城弘一であった。二度目は、築後67年目の1985年７月に改修されている。棟梁は小浜真英、区長は鳩間昭一であった。新築から103年、二度目の改築から36年が経過したが、残念ながら三度目の改築は行われていない。

なお、友利御嶽の大鳥居（神明系）は、1954年10月に鳩間漁業協同組合の全額寄附によって建立された。大工は寄合初雄、左官は仲本長栄であった。アラカ御嶽と西堂御嶽（板記録のまま）の大鳥居も併せて竣工した。

友利御嶽のウブヤーは瓦葺きの建物であり、建物内部の南側窓際に祭壇があって６つの香炉が置かれており、そこからパイディン経由でウボーさらには各御嶽へのお通しができるようになっている。

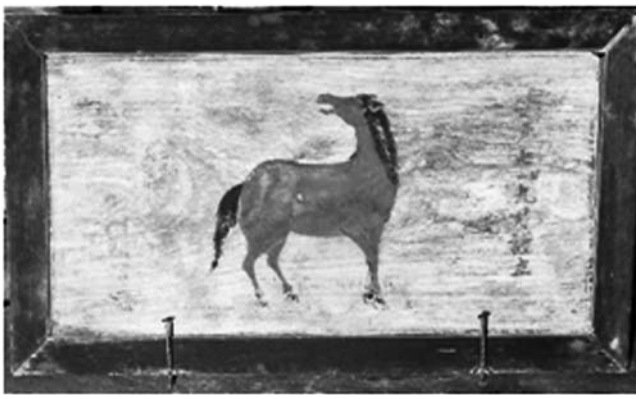
ウブヤーは、島の三大祭祀におけるユードゥーシ（夜通し）、またはユーングマル（夜籠もり）が行われる場である。〔ウボー・パイディン・ウブヤー〕は南北に配置されている。

島の人口が少なくなってしまった現在、すべての御嶽のサカサ（司、神女、巫女）、カンプス（男性神職者）、バキサカサ（脇司）は生まれていない。公民館の役員がそれぞれ役割を分担して総出で祭祀を取り仕切っている。

３　扁額「應禱」の寄進者

友利御嶽のウブヤーの祭壇の上に「友利嶽」と「應禱」の扁額が並んで掛けられている（図１）。二つの額とも貴重なものであるが、損傷が激しく、鳩間島(村)の至宝が危機的状況に置かれている。「友利嶽」の扁額は、1934年に寄合阿加伊佐が謹立（寄進）したものである。馬の扁額は、1918年に村山信充が謹立した（図２）。

〈図１〉友利御嶽母屋の扁額（大城肇氏提供）



〈図２〉村山信充寄進の扁額（大城肇氏提供）

本稿では、〈図１〉の向かって右方に掲げられている「應禱」について考察することとする。扁額には、「應禱」という揮毫の左端に「夏林氏鳩間与人賢憲謹立」と落款が記されている（図３、及び図４）。

〈図３〉鳩間与人賢憲が謹立した扁額(山下恒夫氏提供)

〈図４〉図３の落款(山下恒夫氏提供)

「夏林姓系圖家譜」によると、友利御嶽に扁額を寄進した鳩間与人を勤めた仲本賢憲は、夏林姓第25代に当たることがわかった。夏林姓一族の系図の中から賢憲を中心にまとめたものが、以下の系統図である。

賢親　夏林姓第22代　在番　仲本親雲上

４男

賢永　夏林姓第23代　1723年生まれ、1777年没
鳩間目差（1760年～1762年）
最終役職：頭大浜親雲上（1775年）

４男

賢則　夏林姓第24代　生年不詳
与人（1790年～）
最終役職：頭宮良親雲上

次男

賢憲　夏林姓第25代　生年不詳
鳩間与人（年代不詳）　友利御嶽に扁額謹立
最終役職：西表首里大屋子

甥

賢演　夏林姓第26代　生年不詳
鳩間与人（年代不詳）

賢憲は、生年が不詳であり、鳩間与人としての在任期間も不明であるが、在任中に扁額を謹立（寄進）し、最終役職は西表首里大屋子であった。賢憲の祖父・夏林姓第23代賢永は鳩間目差を勤め、また賢憲の甥・賢演（賢憲の兄・賢榮の長男）も鳩間与人を勤めた。夏林姓家譜からわかるように、夏林姓一族は鳩間与人をはじめとする役人を輩出した家系である。

４　夏林姓賢憲の生年と与人就任年の推定

夏林姓第23代から第26代までの情報をもとに、賢憲の生年と鳩間与人となった就任年を推定する。そのためには、いくつかの留保条件（仮定）が必要である。

まず、第23代「賢永」に関しては正確な情報が得られる。すなわち、夏林姓第22代の在番・仲本親雲上賢親の４男として1723年に生まれ、鳩間目差を1760年～1762年に勤めたことが家譜からわかる。鳩間目差の時の年齢は37歳～39歳であったことになる。賢永の最終職歴は、頭大浜親雲上（1775年就任）であった。

次に、「賢則」(夏林姓第24代)については、次のように仮定する。賢則は賢永の４男であるが、父・賢永32歳の時の子であったとする。本人の職歴は不明であるが、どこかの与人だったとして、35歳の時に就任したとする。なお、与人就任の年齢は共通して35歳とした(大濵永亘氏の推計よる平均年齢)。したがって、賢則は1755年生まれで、1790年に与人に就任したと推定できる。

賢則の次男であった「賢憲」（夏林姓第25代）については、父28歳の時の子とし、本人35歳の時に鳩間与人に就任したと仮定する。すると、われわれが関心のある賢憲は1783年生まれで、1818年に鳩間与人に就任したと推定できる。大濵永亘氏によると、1810～1818年と1819年の鳩間与人勤務者は不明となっているが、1818～1819年の鳩間与人は仲本賢憲であった可能性が高い。

最後に、賢憲の甥「賢演」（夏林姓第26代）は賢憲の兄・賢榮（1782年生～1835年没）の長男である(大濵1988年,81～82頁)。賢演は父23歳の時の子とし、本人35歳の時に鳩間与人に就任したとする。したがって、賢演は1805年生まれで1840年に与人に就任したと推定できる。賢演が鳩間与人に就任したのは1840年であり、1842年まで鳩間与人を勤めたと推定できる。なお、大濵永亘氏によると、1840年～1852年の鳩間与人勤務者は不明となっているので、1852年まで勤めた可能性もある。

以上の推定結果をまとめたものが次のフローである。下線の実線部は実際に家譜で確認できる年、波線部は当方が推定した生年と就任の年である。

① 夏林姓第23代「賢永」は、1723年生まれ
　鳩間目差の任期は1760年～1762年（37歳～39歳）

② 夏林姓第24代「賢則」は、1755年生まれ
　（1790年に与人就任）

③ 夏林姓第25代「賢憲」は、1783年生まれ
　鳩間与人には1818年に就任(～1819年)

④ 夏林姓第26代「賢演」は、1805年生まれ
　鳩間与人には1840年に就任(～1842年または～1852年)

賢憲が鳩間与人として在職した年は1818～1819年と推定できるので、2022年現在は与人就任から204年が経っている。したがって、友利御嶽母屋に謹立（寄進）された賢憲の扁額も200余年の歳月が

経過したことになる。

5　扁額「應禱」の語意

賢憲がどのような人であり、なぜこの２文字を寄進したのかを知るのはたいへん興味深いことであるが、残念ながらその拠り所となる文献史料は探し当てることができない。そこで、彼が寄進した扁額「應禱」の意味を考察することを通して推察したい。

まず、松村明監修『大辞泉』で調べてみると、「應」と「禱」には、それぞれ以下のような意味がある。「應」（応）は、こたえる、いらえるという意があり、そこから問いや呼びかけにこたえる、承知する、外からの求めや働きかけを受けて動くという意味をもつ（325頁）。一方、「禱」（祷）はいのる、神に訴え祈るという意味をもつ（1866頁）。

字形解釈（それぞれの文字のもつ意味の解釈）で定評のある白川静博士によると、「漢字はもともとその時代の社会的儀礼・加入儀礼の実際に即して生まれたものであり、そのような生活の場から離れて、観念的に構成されたものではない」という（白川2012, vi頁）。

『常用漢字解』では、應と禱についてどのような字形解釈がなされているであろうか。まず、「應」（応）のもとの字は、人の膺に隹（鷹）を抱いている形で鷹狩りを意味する字であるという。鷹狩りはわが国では「誓ひ狩り」といわれ、神意を問う占いの方法として行われた。そこで、その鷹狩りの結果は神意のあらわれと考えられた。応という字に「こたえる」という意味があるのは、もとは神意を問うことに対して神が応答する、神が「こたえる」と考えるからであろう（白川2012, 38頁）。

次に、「禱」（祷）のもとの字は、田の疇の間に神への祈りの文である祝詞を入れる器を置いて豊作を禱ることの意味であるという。禱はまた、人の長寿（示＋壽、長生きすること）を祈ることも含んでいるとされる（白川2012, 302頁）。

以上の字形の解釈から、「應禱」には「（友利御嶽に鎮座する）神に鳩間（村）における五穀（稲、粟、麦、キビ、豆）の豊穣と人々の健康長寿を祈る」という意味が込められているといえよう。

6　なぜこの二文字を寄進したか

夏林姓一族は、第23代から第26代（ただし、第24代については不詳）までののべ82年間（1760年～1842年、または賢演が1852年まで鳩間与人を勤めたとするとのべ92年間）にわたって鳩間村の役人を勤めていた。そのため、一族は鳩間村に関して事情をよく理解し、心から村の繁栄を願っていたと推測できる。

大城肇氏によれば、應禱をワ行で読んで「應禱」とすると、「神霊を反映し、繁栄を齎す」含意があり、天地の理念を読んだ境地をあらわしているという。画数からしても、應（17画）と禱（19画）は天数と地数を表す神道の意をもつそうである。

以上のことから、夏林姓一族は信仰心に厚く、賢憲はその血筋を引き、篤信の情を持って鳩間村のムトゥウガンである友利御嶽の祭神に五穀豊穣と村人の健康長寿を禱る「應禱」の二文字を謹立（寄進）したと解釈できる。

7　むすびに

繰り返しになるが、友利御嶽に掲げられている「應禱」の扁額は、鳩間与人だった夏林姓仲本賢憲が謹立（寄進）したものである。賢憲は夏林姓第25代目であるが、1760年～1762年に鳩間目差を勤めたのち、1775年に頭大浜親雲上を勤めた夏林姓第23代仲本賢永の孫にあたる。

仲本賢憲が鳩間与人に就任した年代は不詳であったが、今回の考察の結果、1818年～1819年に在職したと推定できるので、扁額を寄進したのはかれこれ200余年前のことになる。ちなみに、賢憲の最終職歴は西表首里大屋子であった。

仲本賢憲の兄・賢榮の長男・夏林姓第26代の賢演も鳩間与人を勤めた（任期は1840年～1842年、または～1852年と推定できる)。その結果、夏林姓一族が、80余年（1760年～1842年、または～1852年の90余年）にわたって鳩間の役人として勤めていたことを本稿で明らかにすることができた。

「應禱」の扁額は寄進されてから200余年の歳月が経っている上に木板製なので、かなり劣化が進んでいる。この扁額を早急に修復保存することが喫緊の課題である。「應禱」と並んで掲げられている88年前に寄進された扁額「友利嶽」、さらに103年前のウブヤーの新築祝いに寄進された馬の扁額の傷みもかなり進んでいるので、併せて修復保存できれば幸いである。

また、これらの扁額が掲げられているウブヤー（母屋)、さらには母屋とウボー（威部）を結ぶパイディン（拝殿）はいずれも木造瓦葺きであり、シロアリと風化による腐蝕がかなり進んでいる。早急に建て替えまたは改修を行う必要があろう。

鳩間島の祭祀の総元締めであり、最高位の御嶽である友利御嶽の物理的基盤が脆弱化していることは、至極残念である。島のシンボルであり住民の精神的バックボーンでもある、友利御嶽の物理的基盤の修復整備が急がれる。ちなみに2023年癸卯年は、鳩間村が役人を配して独立村になってから320年の節目に当たる。

参考文献

・大濵永亘「琉球王国時代西表島西部北海岸の鬚川村や鳩間島・鳩間村の統治」（『八重山毎日新聞』2017年１月１日付）
・大濵永亘『嘉善姓一門と八重山歴史』（先島文化研究所、1988年10月１日）
・大濵尔也賢保「夏林姓系圖家譜小宗」（宮良賢永氏所蔵）
・「夏林姓系図家譜」（森永用朗氏所蔵）
・加治工真市『鳩間方言辞典』〔初版〕（国立国語研究所、2020年３月20日）
・球陽研究会編『沖縄文化史料集成５　球陽　読み下し編』〔第４版〕（角川書店、1995年７月10日）
・白川静『常用漢字解』〔第２版〕（平凡社、2012年10月30日）
・竹富町史編集委員会編『竹富町史 第六巻 鳩間島』（竹富町役場、2015年３月31日）
・松村明監修『大辞泉』〔第１版〕（小学館、1995年12月１日）

（謝辞）本稿をまとめるに当たり、宮良賢永氏、及び森永用朗氏のご厚意によって夏林姓の系図・家譜を閲覧することができた。記して両氏に感謝したい。また、琉球王国時代の鳩間村の統治については、大濵永亘氏の著作を参考にした。併せて謝意を表したい。さらに、大城肇氏から助言をいただいた。とりわけ語意に関する考察では、氏の見解が大いに参考になった。言うまでもなく、残された誤りは筆者の責に帰する。なお、友利御嶽母屋に収蔵の扁額と板記録の閲覧と撮影を許可してもらった仲宗根豊鳩間公民館長、および写真を提供してもらった山下恒夫氏にも感謝する。

わらじの民俗

ウルズン（陽春）の季節、島は潮の香りに包まれます。１年のうちでもっとも潮が引くサニチ（旧暦３月３日）に、女子は海水で身を清めるため、浜下りをするのだといいます。また、この日は獲れた海の幸が食卓をにぎわせる楽しみも見受けられます。

「潮干狩りに女性たちはアンスク（編袋）やフチ（わらじ）を準備したものです」と屋嘉武雄氏(1925年生、鳩間島出身)。フチはタカウール（高サンゴ、枝サンゴ）を踏んで足を傷めないように２本準備し、１本は腰に下げて浜下りしたといいます。

特に鳩間島の東側をとりまく環礁のくぼんだところ(ナーバレー)は、タク(蛸)がよく獲れましたが､タカウールが密生し気を配ったそうです｡また､そこは潮の流れが早く､帰りが遅くなると､女子が渡るには難しかったとのことです。

『鳩間方言辞典』には､屋嘉氏のお話とほぼ同じ内容が記されています｡屋嘉氏の記憶と『鳩間方言辞典』の記述の正確さに瞠目するばかりです。

『鳩間方言辞典』は、さらに『万葉集』の「信濃道は今の墾り道刈りばねに足踏ましなむ沓はけ我が背」〈No.3399〉（信濃道は最近開いたばかりなので、切り株を踏まないように沓を履いていって下さいね、あなた)を引き、「フチ」は「クツ」(沓、靴)がクツ→フツ→フチと転訛した言葉としています｡この歌から万葉時代､わらじ、サンダル、スリッパ状のものを「くつ」と表現したことが考えられます｡つまり､「フチ」は「わらじ」よりも古い借用語だというわけです。

竹富島でもわらじは「フチ」(『竹富方言辞典』参照)。竹富島の古謡《まれちゆんた》は海辺を舞台に、「ぷつふまば　ぱんふみ（草履をはいて足を〈合図に〉踏んで／ふかんかい　ばぎゃおーら（外の方へ私達は行きましょう)」とうたっています。同じルーツを持つ言葉でも、切り株に注意を払って履いた万葉時代の「沓」が、時空を越えた八重山でタカウールを踏むのを危惧して履く「フチ」として、用途を広げつつ伝わってきたと思うと､感慨深いものがあります。

また、大底朝要氏は「古見村のくらし」(『沖縄芸術の科学』〈第10号〉) のなかで、わらじの意外な用途を書き残しています。お産のとき、サスカ（組立式の囲炉裏）にジンギ（シマトネリコ）を燃やして産室を温くしましたが、同時に産婦のお腹も温める必要がありました。そこで、お腹にわらじを当て、それに体温を移しながらお腹を温めたというのです。そして、無事に子どもが生まれたら、わらじ一足を竹竿につるし二番座の軒に立てた、と記しています。

（飯田泰彦）

撮影・提供　石垣佳彦

参考文献　（発行年順）

- 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成　Ⅳ　八重山篇』(角川書店、1979年)
- 斎藤茂吉『万葉秀歌』〈下巻〉〔第71刷〕(岩波書店、1991年)
- 伊藤博校注『万葉集』〈下巻〉〔第11版〕(角川書店、1993年)
- 大底朝要「古見村のくらし」(『沖縄芸術の科学』〈第10号〉沖縄県立芸術大学附属研究所、1998年)
- 国立国語研究所編『沖縄語辞典』〔第８刷〕(大蔵省印刷局、1998年)
- 前新透／著、波照間永吉・高嶺方祐・入里照男／編著『竹富方言辞典』(南山舎、2011年)
- 竹富町史編集委員会編『竹富町史 第六巻 鳩間島』(竹富町、2015年)
- 加治工真市『鳩間方言辞典』(国立国語研究所、2020年)

マシュク村遺跡幻想

西前津　松　市

竹富島の新里村西遺跡や波照間島のマシュク村遺跡などに道路はない。屋敷地は高い石垣で囲われているが（後者で『高い所で３、４メートル』）、屋敷間の行き来は石垣の切れた通用門を利用した。海からの外敵への備えと強い北風対策からそのような特異な形態になったようだ。とはいえマシュク村遺跡から「およそ70軒の屋敷跡と二つの共同井戸が確認され」ているが、この結構な広さの範囲に道路は存在しないのだから、ちょっとした夢、幻の感を覚え、ついでに波照間の島建て神話の一節を頭に浮かべてしまう。

人口が爆発的に増えたので食糧確保のため島の隅々まで耕され、ついには道路さえも耕作地に取り込まれてしまった。そこで耕作地を囲うサンゴ石灰岩の石垣の上が道路替わりになった。それでも土地は足りないので、雨降りに大草鞋を履いて外を出歩き、草鞋に付着した土を屋敷囲いの石垣の上に敷いてニラを植えた。

ここには道のないマシュク村遺跡の佇まいが投影しているように思われないこともない。確かに土地改良以前の波照間島には耕作に不向きな場所にも耕作地縁の名残りと思しき石垣の残滓がいくらも見られたし、古老からはピテーヌワー（原御嶽）の内部にさえ畑地跡のような区画があると聞かされたこともある。人口増加等に伴う食糧確保のために農耕が適わないような場所にも鍬を入れ続けたのだろうか。そういう状況が拡大したので道をも耕してしまったと島建て神話は伝えるのだろう。そのストーリーはマシュク村遺跡の道のない佇まいの印象が紡いだ幻想のようなものと言わないまでも、ストーリーのリアリティ醸成に一役買った可能性はないだろうか。

コルネリウス・アウエハントの『HATERUMA』に「『神話的』出来事が実際に歴史時代にあったに違いないという特異な点にぶつかる」とある。唯一アバーミ（油雨）の災厄を生き延びた兄妹（島人の始祖）が現存する特定の家とつながっている点などを指すのだが、道がなくなるというモチーフもそれに該当しないだろうか。屋敷を囲う石垣の上に土を被せてニラを栽培したことにしても、海岸背後岩盤上の屋敷地は表土が浅く野菜の栽培には不向きだったろうから十分考えられる。その一風変わった栽培法は伝承に付されただろうから、そのことも島建て神話に刷り込まれたように思うのは夢想に過ぎないだろうか。

第42回竹富町史編集委員会　議事録

第42回竹富町史編集委員会が下記のとおり開催された。

とき　2021年12月３日（金）　午前10時～午後４時
場所　竹富町教育委員会会議室

出席は、石垣久雄、里井洋一、新本光孝、上江洲儀正、大城肇、大浜修、島村賢正、通事孝作、西里喜行、花城正美、三木健、吉川安一（12人）。欠席は、石垣金星、西表隆夫、狩俣恵一、鳩間真英、花井正光（５人）。

編集委員会に先だって、次期（令和４年１月４日～令和５年12月28日）の竹富町史編集委員委嘱公布式が行なわれた。次の17人に編集委員を委嘱した。

石垣久雄、里井洋一、新本光孝、池田克史、石垣金星、西表隆夫、上江洲儀正、大城肇、大浜修、狩俣恵一、島村賢正、通事孝作、西里喜行、鳩間真英、花城正美、三木健、吉川英治。

編集委員会の次第は次のとおり。

竹富町教育委員会教育長あいさつ　佐事安弘
竹富町史編集委員会委員長あいさつ　石垣久雄
経過報告（「2021年度　竹富町史編集日誌」本号33頁参照。ここでは割愛）
編集委員会審議（８議題）

竹富町教育長・佐事安弘氏より教育長就任のあいさつが行なわれ、そのなかで竹富町史編集事業の重要性が述べられ、委員各位に協力を呼び掛けた。続いて竹富町史編集委員長・石垣久雄氏はあいさつのなかで、「「島じま編シリーズ」刊行の遅延に伴い、その影響が全体に及んでいます。本日の集委員会は、眼前にひかえた『西表島編』『黒島編』の進捗状況の確認と同時に、編集事業全体を見直す有意義な会議にしたいと思います」と、第42回編集委員会の意義が強調された。

そして、次の八つの議題について、委員長・石垣久雄、副委員長・里井洋一の進行によって審議された。

１　『竹富町史だより』の刊行について（事務局報告）
２　『竹富町史　第11巻　資料編　新聞集成Ⅷ』の発刊について（事務局報告）

3　『西表島編』の進捗状況について（里井洋一報告）
4　『黒島編』の進捗状況について（鳩間真英報告〈代読〉）
5　『自然編』〈ビジュアル版〉について（新本光孝報告）
6　『郷友会編』について（狩俣恵一報告〈代読〉）
7　発刊計画について
8　その他

1　『竹富町史だより』の刊行について（事務局報告提案）

『竹富町史だより』は、「町民参加の町史づくり」として、1992年（平成４）３月に創刊された。2022年度（令和４）には〈第50号〉の刊行が予定されている。竹富町は2023年（同５）に町制75年を迎えるが、その節目にあたり〈第１号〉～〈第50号〉までの合冊本を発刊する提案が承認された。

2　『竹富町史 第11巻 資料編 新聞集成 Ⅷ』の発刊について（事務局報告）

2020年度、『竹富町史 第11巻 資料編　新聞集成　Ⅷ』が発刊され、慶田盛伸氏による書評（『八重山毎日新聞』８月８日付）を皮切りに、さまざまな反響があった（『竹富町史だより』〈第48号〉参照）。

「資料編　新聞集成」のシリーズは、1898年（明治31）４月１日以降の沖縄県内で発行された新聞から、竹富町に関する記事を集成したもので、本書はその第８冊目の刊行である。

これまでは数年ごとを１冊にまとめていましたが、1960年代に入ってからは収録記事や、１件の記事に対する文字数が増えたことにより、本書から（1966年から）１年単独を対象として編集することになった。このことに伴い装丁をソフトカバーに変更することになった。

竹富町史編集事業として、「資料編　新聞集成」シリーズは、沖縄の本土復帰年（1972年）をもって一区切りとするが、今後は各冊の対象期間を１年として刊行していく計画である。

3　『西表島編』の進捗状況について（里井洋一 報告）

石垣金星氏欠席のため、副部会長の里井洋一氏より、「西表島編専門部会」及び「臨時部会」開催状況についての報告があった。専門部会としては、第14回（２／19)、第15回（５／29)、臨時部会（６／13)、臨時部会（６／23)、第16回（７／11)、臨時部会（７／31)、第17回（12／２）の計７回の部会を開催した。

新規の原稿依頼として、「動物」「植物」の原稿を安間繁樹氏に（原稿受理)、「舟造り」を板井英伸氏に（原稿受理)、「言語」を金田章宏氏に（原稿受理）それぞれ依頼し受理している。

臨時部会では、主に〈下巻〉に編集する「人物」の章についての話し合いを重ねた。掲載人物の選定を行うため、基準を設け、リストを作成した。それを基に書籍、記録、地域及び公民館に選定（追加、削除、修正）をしてもらいながら、リストの確定と執筆者への依頼を行なった。

また、未提出原稿の提出締め切りを６月12日に定め、「世界遺産」原稿を花井正光より受信。石垣金星氏原稿に関しては未完である。12月議会のスケジュール上、本年度に〈上巻〉、来年度に〈下巻〉を刊行するため、〈上・下〉ともに原稿の最終締め切りを９月30日とした。令和３年度の補正予算申

請締め切りが10月14日であったが、版下制作の請負契約がなされていないことや成果現物がないことから、補正予算として印刷・製本費（『西表島編』）の計上（申請）が認められなかった。

〈上巻〉の版下は、３月末までに制作。〈下巻〉の原稿は、３月末までに提出。令和３年度は、〈上巻〉の版下制作まで。令和４年度で、〈上巻〉印刷製本。令和５年度、〈下巻〉の印刷製本をすることになった。

４　『黒島編』の進捗状況について（鳩間真英 報告〈代読〉）

第41回竹富町史編集委員会では、黒島編専門部会長・鳩間真英氏より、専門部会発足当初(2004年)からの経過を振り返りつつ、『竹富町史　第４巻　黒島』の進捗状況の報告があった。

とりわけ、2016年以降、毎月10日前後に執筆者の有志が集まって、原稿の読み合わせが恒例となって行なわれていたのは特筆できる。しかし2020・2021年度は、コロナ禍の影響や専門部会委員の体調不良のため、専門部会、原稿読み合わせともに一度も開催することができなかった。

今年度中（2021年度）に専門部会を開催し、専門部会の体制を立て直したい。また、体調が良くない執筆者や高齢の執筆者から、執筆の交替を要望されているが、そのことについても応じる必要がある。

原稿は大雑把に約４割が提出済であるが、仮提出がほとんどで、参考文献などの確認や注記を要する箇所が多くみられる。新本光孝氏の原稿「第３章　自然」については、日々新たな記述が更新されており精度が高まっている。

また、懸念されている第16章「人物」については、2019年10月に「人物調査票」を作成し、関係者に配布したが集計できていない。早い取り組みが求められる。

その他、既に原稿を提出している執筆者から、原稿をいったん取り下げる申し出が幾つかあった。その理由は、発刊計画の大幅な遅延から、原稿提出時から随分時間が経過したことによるところが大きい。すなわち現在、既述の情報（研究）が更新されており、新たな知見を加えた原稿に改訂したいとのことである。また、提出原稿の内容を含む著書を近く刊行する場合、原稿(論文)の発表順など、著書との整合性をとらなければならない事情が町史編集係に報告されているが、こういったことにも慎重に対応しなければならない。

観光に関する記述については、これからの刊行物は「世界史に刻まれるであろう新型コロナの影響について加筆すべきと感じています。また、世界自然遺産登録などの影響による、西表島や竹富島の入島制限が、黒島に与える影響は大きいと見込まれ、その点も加えたほうが良いと感じています」との意見もいただいている。

来年度は専門部会を中心に、定期的な原稿読み合わせを復活させ、『竹富町史　第４巻　黒島』の発刊に向けてしっかり取り組んでいきたい。

５　『自然編』〈ビジュアル編〉について（新本光孝 報告）

『竹富町史　自然編』（以下、『自然編』）について、第32回編集委員会（2015年）で西表島の世界自然遺産登録を視野に入れ、写真を中心とした「ビジュアル編」と、自然環境と暮らしに焦点を合わせた「資料編」の２冊を刊行することになった。

ところが、今年度（2021年）「奄美大島、徳之島、沖縄北部及び西表島」の世界自然遺産登録が決定後、『自然編』の需要が高まっているが、「資料編」の進捗・報告がみられない状況である。このことから、「ビジュアル編」「資料編」を統合し、『自然編』の内容を充実させる方針を提案したところ、この提案が承認された。そして、「ビジュアル編」で提示した「総合目次」〈第５次案〉（章・節・項レベル）を基本に、それに応じた「資料」を加味していく方向性が確認された。『自然編』の小委員会のメンバーには、改めて新本光孝(委員長)、上江洲儀正、島村賢正の３氏が互選により決定した。

原稿の執筆については、執筆者や資料・写真提供者の了承を大方得ているので、今後は公的な手続きを踏みながら、着実に進めていく計画である。

６　『郷友会編』について（狩俣恵一 報告〈代読〉）

第38回竹富町編集委員会では、『竹富町史　郷友会編』の取り組みにおいて、組織的な編集を進めるため、各島の担当者が決定した。当面は担当者が中心となり、資料収集や諸連絡など、基礎的な作業を行なうことになった。

郷友会に関する資料収集について、竹富島の郷友会以外の資料が脆弱であり、その他はほとんど集まっていないように見受けられる。第42回竹富町史編集委員会では、今後の取り組みの参考として、大雑把ではあるが、郷友会資料、関連論文資料を提示した。これらから、近年は学術研究の対象として、郷友会が注目されていることも指摘できる。

ここでは今後の取り組みに供するため、「資料収集」と「調査」の課題を、思いつくまま箇条書きにしてまとめた。

⑴　資料収集について

・事務局（編集係）が中心となり、郷友会発行の資料、地元紙掲載の記事などを広く収集する。
・記録資料を補うため、本土・沖縄・石垣在の各郷友会の聞き書きを行う。
・地元（親島）からの聞書きも必要と考える。
　１）　親島の方が、郷友会をどのように見てきたか。
　２）　親島の方が郷友会に期待することなど。

⑵　聞き書き資料の調査と作成について

・聞き書き資料の調査と作成には、本土・沖縄・石垣に担当編集委員を置く。また、具体的な協力者を挙げる必要がある。
・沖縄本島の聞き書き、東京の聞き書きは急務で、早く作業に取り組む必要がある。八重山の聞書き資料の作成は、島々村々の公民館長と在石垣郷友会の協力を得る必要があると思われる。

⑶　令和４年の小委員会について

・小委員会は、令和４年７月の編集委員会定例会までに開催したい。
・小委員会では、上記⑴⑵を検討し、令和４年12月の町史編集委員会に上程したい。
・小委員会では、執筆者・編集作業の手順・目次作成についても検討を始めたい。

⑷　予算について

・令和４年12月の町史編集委員会では調査計画を提示し、令和５年度の予算への計上を申請したい。

⑸　聞き書き資料の調査について

・令和５年度には、聞き書き資料の作成のための調査を実施したい。

7　発刊計画について

⑴　発刊計画の見直し

第42回竹富町史編集委員会で、発刊計画が見直され、次のような計画が確認された。2023年度までは次の表のとおり。2024年度、2025年度に関しては、『自然編』『黒島編』の進捗を見ながら、黒島編専門部会・自然編小委員会で調整を行なうことになった。

年度	刊　行　物	備　考
2021年度	『町史だより』〈第48号〉、〈第49号〉 『竹富町史　第７巻　波照間島』増刷	
2022年度	『竹富町史　第８巻　西表島』〈上巻〉、 『町史だより』〈第50号〉〈第51号〉	
2023年度	『町史だより』〈第52号〉、〈第53号〉 『竹富町史　第８巻　西表島』〈下巻〉、	竹富町制75年周年につき、『町史だより合冊』（今回提案）
2024年度	『町史だより』〈第54号〉〈第55号〉	『黒島編』と『自然編』を調整。
2025年度		『竹富町史　第11巻　資料編　新聞集成Ⅸ』（1967年の新聞資料）。

⑵　『竹富町史 第八巻 西表島』の進捗状況に伴う発刊計画の見直し

『竹富町史 第八巻 西表島』（以下、『西表島編』）について、原稿の最終締め切りを2021年３月31日と設定していたが未提出原稿が多く、当局より2021年度予算に対して疑問視され、版下制作費のみ確保することになった。そのことを深刻に受けとめ、石垣久雄委員長より「『西表島編』章立て再検討について」（2021年５月６日付）が提案された。

この提案が第15回西表島編専門部会（５月29日開催）で承認され、『西表島編』は未提出原稿の「自然」の章を〈下巻〉に収録して再構成し、改めて「自然」の執筆を依頼することになった。

刊行を発刊計画どおりに進めるためには、スケジュール上、12月竹富町議会で補正予算を申請する必要があったが、未提出原稿が残っていること、まだ版下制作請負契約がなされていないことなどの理由から、印刷製本費を補正予算に計上することが認められなかった。

その結果、本編集委員会で上の表のとおり、2022年度に〈上巻〉、2023年度に〈下巻〉と発刊計画を変更した。

⑶　竹富町史編集事業の見直し

当初の竹富町史編集事業計画では、竹富町関連資料を網羅した「資料編シリーズ」を整えたあと、「島じま編シリーズ」に取り組むことになっていた。しかし、執筆者や情報提供者の高齢化のため、2010年から軸足を「島じま編」に移してきた経緯がある。

しかし、「島じま編」の刊行が計画通り進まないところを、近年は『新聞集成』〈Ⅶ〉（2020年度）、〈Ⅷ〉（2021年度）の刊行で補ってきた。そのため編集委員会の開催ごとに発刊計画が見直されて

いる状況である。ここで今後予定されている刊行物を確認し、今一度編集事業全体を見直し、テーマに沿って小委員会を立ち上げて取り組む必要性が強調された。

◆　今後予定されている刊行物

・『竹富町史　第１巻　通史』
・『竹富町史　第４巻　黒島』（島じま編シリーズ）
・『竹富町史　第８巻　西表島』〈上巻〉〈下巻〉（島じま編シリーズ）
・『竹富町史　島じま編索引』（島じま編シリーズ）
・『竹富町史　第10巻　資料編　前近代』〈資料各種編〉（前近代、近代、社会・産業編）
・『竹富町史　第11巻　新聞集成』〈９〉～〈15〉（新聞集成シリーズ）（1967～1972年）
・『竹富町史　自然編』
・『竹富町史　郷友会編』
・『竹富町史　言語篇』
・「竹富町資料集シリーズ」
・『竹富町史　総索引』
・『竹富町史だより　合冊』〈上巻〉〈下巻〉

8　その他

⑴　『竹富町史 第七巻 波照間島』の増刷について（波照間島編専門部会・島村賢正報告）

『竹富町史 第七巻 波照間島』（以下、『波照間島編』と略記）の品切れに伴い、第41回竹富町史編集委員会（2020年12月開催）で『波照間島編』の増刷が承認された。

その後、『波照間島編』の執筆者28人、関係者数名に呼び掛け（2021年５月）、各自担当箇所、関連個所についてチェックし、島村賢正が集約した。その結果、約300箇所の検討事項があがったため、下記のとおり波照間島編専門部会を臨時的に開催することになった。

時　間　2021年９月28日午前10時～午後２時。
場　所　竹富町教育委員会会議室。
出席者　玉城功一、大泊孝、島村賢正（専門部会委員）
　　飯田泰彦、米盛恭子（町史編集係）

検討箇所については、該当頁をすべてコピーして出席者に配布し、ひとつひとつ確認を行なった。検討内容は事実確認に留まらず、筆者から文章を改めてより良い表現を求めるものもあったが、「増刷」の性格上、原則的に誤字脱字の訂正、人権に関わることについてのみの訂正に留めることにした。言葉の足りない文章表現については、文意が理解できるものであれば、当時精一杯取り組んだ証としてそのまま残しておくことにした。

また混乱を避けるため、刊行年（2018年）以降の事象は追記しないことにした。例えば、2020年に波照間島で新種ヤエヤマヒメアマガエルが発見されたこと、第12章「人物」において2018年以降に故人となられた方々の記載は行なわないことにした。

2021年度　竹富町史編集日誌

４月14日　・小浜島の文化財巡見（町史編集係）。

４月30日　・『竹富町史 第八巻 西表島』〈下巻〉（以下、『西表島編』〈下〉と略記）原稿締め切り。
→板井英伸「舟造り」受理。

５月６日　・石垣久雄「『西表島編』章立て再検討について」（提案）
→西表島編専門部会委員各位より承認を得、「自然」の章を〈下〉に収録し、安間繁樹氏に執筆依頼を承認。

５月29日　・第15回西表島編専門部会開催。

６月１日　・金田章宏氏に『西表島』〈下〉第13章第２節第１項「言語」の執筆依頼（社会文化課第267号）。

６月３日　・安間繁樹氏に『西表島』〈下〉第６章「自然」の執筆依頼（社会文化課第号）。

６月12日　・石垣金星氏、花井正光氏担当原稿締め切り。

６月13日　・臨時西表島編専門部会開催。

６月23日　・西表島編専門部会（臨時部会）開催。

７月11日　・第16回西表島編専門部会。

７月22日　・安間繁樹『西表島』〈下〉「自然」受理。

７月30日　・金田章宏『西表島』〈下〉「言語」受理。

７月31日　・西表島専門部会（臨時部会）開催。

８月２日　・「自然編」〈ビジュアル版〉臨時会議。本格的な取り組みに向けての準備会議（新本光孝担当）。

８月８日　・慶田盛伸「書評『竹富町史 第11巻 資料編　新聞集成　Ⅷ』」（『八重山毎日新聞』掲載）

８月26日　・與那國光子「『竹富町史 第11巻 資料編　新聞集成Ⅷ』の刊行に寄せて」①～④（『八重山毎日新聞』８月26日～８月29日連載）

８月31日　・吉川安一氏の原稿「望郷　鳩間島」（『竹富町史だより』〈第49号〉掲載予定）の校正終了。

９月25日　・「社説　八重山商工高校誕生前年　―竹富町史新聞集成Ⅷを読む―」『八重山毎日新聞』９月25日掲載。

９月28日　・『竹富町史　第七巻　波照間島』増刷にあたり、訂正・修正箇所の検討会議。
→訂正・修正箇所を確定し、改めて契約を検討。

10月７日　・石垣市教育委員会に「資料使用・転載許可申請書」、石垣佳彦氏に「資料使用・転載許可申請書」提出（『竹富町史だより』〈第48号〉の使用写真について）。

10月15日　・「写真資料使用許可証」（石垣市第35号）。

10月29日　・『竹富町史だより』〈第48号〉発刊。

11月３日　・吉川安一氏（町史編集委員）が八重山毎日文化賞特別賞受賞。

11月15日　・『竹富町史 第八巻 西表島』〈下巻〉第14章の１項目「古見方言基礎語彙小辞典」受理。

・『竹富町史 第八巻 西表島』〈上巻〉第３章第21節第７項「西表島の世界自然遺産登録」

（改原稿）受理。

12月２日　・第17回西表島編専門部会。

12月３日　・第42回竹富町史編集委員会開催。

１月11日　・コロナウイルス感染予防につき、リモートワーク開始（→１月31日）。

２月４日　・第８回黒島編専門部会開催。

・吉川英治氏、池田克史氏に竹富町史編集委員を委嘱。

３月２日　・石垣佳彦氏に「資料使用・転載許可申請書」を提出（『竹富町史だより』〈第49号〉の使用写真について）。

３月31日　・『竹富町史だより』〈第49号〉刊行。

・『竹富町史 第七巻 波照間島』［初版第２刷］刊行。

『竹富町史だより』〈第48号〉正誤表―お詫びと訂正―

『竹富町史だより』〈第48号〉の掲載事項に誤りがありました。
お詫び申し上げますとともに、下記のように訂正いたします。

訂　正　箇　所	誤	正
27頁　中段７『西表島の民謡』文中４行目	通事健次	通事建次
37頁　「西表島干立（星立）に関する資料」表の下から４、２、１段目。 38頁　同表の上から４、８、９、10行段目。	竹富町役場企画課	竹富町役場総務課

2021年度　受贈図書一覧

書誌　（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『伊佐浜の土地闘争　解説編　宜野湾市史第８巻資料編７戦後資料編Ⅱ』（沖縄県宜野湾市教育委員会教育部宜野湾市立博物館、2021年）	沖縄県宜野湾市教育委員会教育部宜野湾市立博物館	宜野湾市教育委員会
『石垣市史叢書25』（2021年）	石垣市教育委員会市史編集課	石垣市教育委員会
『西表島研究　2019　東海大学沖縄地域研究センター所報』（東海大学沖縄地域研究センター、2020年）	東海大学沖縄地域研究センター	東海大学沖縄地域研究センター
『大富開拓40周年記念史』（大富開拓団、1992年）	記念史編集委員会	崎山石材
『大原小学校創立五十周年記念誌　大原っ子』（竹富町立大原小学校創立五十周年記念事業期成会、1995年）	記念誌編集委員会	崎山石材
『大見武古島遺跡』与那原町文化財調査報告書〈第５集〉－与那原幹線鉄塔№18移設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」』（与那原町教育委員会、2020年）	与那原町教育委員会	沖縄県与那原町教育委員会
『沖縄県地域史協議会会誌』〈第44号〉（沖縄県地域史協議会、2021年）	沖縄県地域史協議会	沖縄県地域史協議会
『沖縄県平和祈念資料館だより』〈第40号〉（沖縄県平和祈念資料館、2021年）	沖縄県平和祈念資料館	沖縄県平和祈念資料館
『沖縄食糧七十年史』（沖縄食糧、2021年）	沖縄食糧創立70周年記念史編集委員会	竹富町役場総務課
『沖縄と色川大吉』（不二出版、2021年）	三木健編	三木健
『沖縄渡名喜方言辞典』（渡名喜村、2021年）	比嘉松吉	渡名喜村教育委員会
『沖縄の「離島」差別　－西里喜行とその時代（３）－』〈第71巻第２・３号〉（小樽商科大学商学討究、2020年）	小樽商科大学商学討究	今西一
「沖縄の民衆と差別　西里喜行氏に聞く（１）」（総合学術誌『アリーナ』〈第22号〉中部大学）［抜刷］（2019年）	今西一・石川亮太・天野尚樹編	西里喜行
「沖縄の民衆と差別　西里喜行氏に聞く（２）」（総合学術誌『アリーナ』〈第23号〉中部大学）［抜刷］（2020年）	今西一・大濵郁子・石川亮太編	今西一、西里喜行
『沖縄文学碑めぐり』（那覇出版社、1986年）	垣花武信　東江八十郎著	崎山石材
『沖縄文化研究』〈48号〉（法政大学沖縄文化研究所、2021年）	法政大学沖縄文化研究所	沖縄文化研究所所長

書誌　（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『おきなわ村の伝説』（那覇出版社、1993年）	青山洋二	崎山石材
『恩納村史』〈第２巻考古編〉（沖縄県恩納村役場、2020年）	恩納村史編さん委員会	沖縄県恩納村役場
『風　名桜大学「琉球文学大系」編集刊行事務局報』〈第４号〉（名桜大学環太平洋地域文化研究所、2021年）	名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学大系」編集刊行事務局	名桜大学太平洋地域文化研究所
『語り継ぐ受け継ぐ豊見城の戦争記憶映像資料ハンドブック』（豊見城市教育委員会、2020年）	豊見城市教育委員会文化課	豊見城市教育委員会
『「学校芸能」の民俗誌－創造される八重山芸能』（森話社、2017年）	呉屋淳子	呉屋淳子
『感想文集　ひめゆり』〈第31号〉（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和記念資料館、2020年）	尾鍋拓美・仲田晃子	ひめゆり平和祈念資料館
『北中城村歴史風致資産調査報告書－祭祀－』（北中城村教育委員会、2021年）	北中城村教育委員会	北中城村教育委員会
『記念誌　白浜中学校体育館落成』（竹富町立白浜小中学校同行体育館内部施設充実期成会、1985年）	白浜小中学校体育館落成記念誌編集委員会	崎山石材
『グスクとしての首里城－東アジアの視点から－』法政大学沖縄文化研究所主催シンポジウム報告書（法政大学沖縄文化研究所、2021年）	大里知子編	沖縄文化研究所所長
『国指定重要無形民俗文化財西表島の節祭（干立）タナシ修理新調記録集』（干立公民館、2021年）	干立公民館タナシ製作実行委員会	干立公民館
『久米島町史資料編１　久米島の戦争記録』（久米島町役場、2021年）	久米島町史編集委員会	久米島町教育委員会
『県内市町村史に掲載された中国での戦争体験記を読む　～沖縄出身兵170人の証言～』（2021年）	沖本裕司	沖本裕司
『小浜島の自然・暮らし・文化－山・里・海を繋ぐ－』（小浜公民館、2021年）	新本光孝　他11名	小浜公民館
『古見小学校創立100周年記念誌　夢の花』（竹富町立古見小学校創立百周年記念事業期成会、1998年）	竹富町立古見小学校創立百周年記念事業期成会	崎山石材
『師弟同行　八重山高校22期　卒業50周年記念誌』（八重山高校22期卒業50周年記念誌編集委員会、2020年）	八重山高校22期卒業50周年記念誌編集委員会	大城辰彦
『シマジマのしまくとぅば　－危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究－』〈２〉（琉球大学島嶼地域科学研究所令和２年度）	文化庁委託事業報告書　琉球大学島嶼地域科学研究所	島村賢正

書誌　（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『新制東海大学設立認可申請書類』〈下〉［東海大学資料叢書９］（学校法人東海大学学園史資料センター、2021年）	学校法人東海大学望星学塾学園史資料センター	学校法人東海大学学園史資料センター
『新盛家　沖縄県指定有形文化財（建造物）』（祖納公民館、2021年）	「新盛家」編集委員会	祖納公民館
『人類の自然誌』（雄山閣出版、1977年）	伊谷純一郎・原子令三編	通事孝作
『世界ウチナーンチュセンター　沖縄に本家をつくろう!!』（世界ウチナーンチュセンター設置支援委員会、2020年）	大城直子	世界ウチナーンチュセンター設置支援委員会
『尖閣への想い遥かなり－父子２代上陸調査の夢果たす－』（尖閣諸島文献資料編纂会、2021年）	正木譲	正木譲
『第２イリノソコ古墓群－平成30年度イリノソコ地区ほ場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』－宮古島市文化財調査報告書〈第27集〉（宮古島市教育委員会、2021年）	宮古島市教育委員会	宮古島市教育委員会 生涯学習振興課
『第２西皆粉地の古墓・ウヅラ嶺の古墓・ウヅラ嶺の壕・嘉手川アガリノミ子の古墓－平成29年度狭間地区・ウヅラ嶺地区・イリノソコ地区のほ場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』－宮古島市文化財調査報告書〈第25集〉（宮古島市教育委員会、2020年）	宮古島市教育委員会	宮古島市教育委員会 生涯学習振興課
『竹富小学校　創立百周年記念しおり』（竹富町立竹富小学校創立百周年記念事業期成会、1992年）	竹富町立竹富小学校 創立百周年記念事業期成会	崎山石材
『竹富町海洋教育副読本』（竹富町教育委員会、2021年）	竹富町教育委員会	竹富町教育委員会
『竹富町海洋教育副読本－学校保管用－』（竹富町教育委員会、2021年）	竹富町教育委員会	竹富町教育委員会
『竹富町立大原小学校　創立五十周年記念』－記念式典・祝賀会しおり－（竹富町立大原小学校、1994年）	大原小学校創立五十周年記念事業期成会	崎山石材
『竹富町立大原中学校　創立40周年記念誌』（竹富町立大原中学校　創立40周年記念事業期成会、1989年）	竹富町立大原中学校　創立40周年記念事業期成会	崎山石材
『竹富町立小浜小学校　創立百周年記念誌うふたき』（竹富町立小浜小学校、1997年）	記念誌委員会	崎山石材
『竹富町立小浜小学校創立百周年記念のしおり』（竹富町立小浜小学校創立百周年記念事業期成会、1995年）	竹富町立小浜小学校創立百周年記念事業期成会	崎山石材

書誌　（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『竹富町立竹富小学校　創立百周年記念誌うつぐみ』（竹富町立竹富小学校、1993年）	記念誌作成委員会	崎山石材
『竹富町立波照間小学校　創立百周年記念誌　波の子』（竹富町立波照間小学校創立百周年記念事業期成会、1995年）	記念誌編集委員会	崎山石材
『竹富町立波照間小学校　創立百周年記念しおり』（竹富町立波照間小学校創立百周年記念事業期成会、1994年）	竹富町立波照間小学校　創立百周年記念事業期成会	崎山石材
『竹富町立波照間中学校　創立50周年記念－記念式典・祝賀会しおり－』（竹富町立波照間中学校記念事業期成会、1998年）	竹富町立波照間中学校　記念事業期成会	崎山石材
『竹富町立波照間中学校　創立五十周年記念誌　羽ばたかん大空へ』（竹富町立波照間中学校　創立五十周年記念事業期成会、1999年）	記念誌編集委員会	崎山石材
『竹富町立鳩間小学校　創立100周年記念　－記念式典・祝賀会しおり－』（1996年）	竹富町立鳩間小学校　創立百周年記念事業期成会	崎山石材
「多良間島におけるツバメの方言名、ヤウカニス・ヨーカニスの由来」（『宮古島市総合博物館紀要』〈第25号〉〔抜刷〕）（2021年）	渡久山章	渡久山章
『朝貢体制と琉球王国』－西里喜行とその時代（４）－〈第71巻第４号〉（小樽商科大学商学討究、2021年）	小樽商科大学商学討究	今西一
『東海大学学園史ニュース』〈№15〉（学校法人東海大学学園史資料センター、2021年）	学校法人東海大学学園史資料センター	学校法人東海大学学園史資料センター
『豊見城市史だより』〈第14号〉（豊見城市教育委員会教育部文化課豊見城市史、2020年）	豊見城市教育委員会教育部文化課（豊見城市史）	豊見城市教育委員会
『仲原善忠資料』沖縄研究資料32－著書論文目録「家庭制度の主張」「わか葉」（法政大学沖縄文化研究書、2021年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所所長
『南城市の沖縄戦－証言編－大里』（2021年）	南城市教育委員会文化課市史編さん係	南城市教育委員会
『年報』〈第31号〉（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和記念資料館、2020年）	公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団ひめゆり平和記念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『ひめゆりとハワイ』（公益財団法人ひめゆり平和記念財団、2021年）	ひめゆり平和祈念資料館付属ひめゆり平和研究所	ひめゆり平和研究所
『ひめゆり平和祈念資料館資料館だより』〈第64号〉（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和記念資料館、2019年）	公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和記念資料館	ひめゆり平和祈念資料館

書誌　（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者
『ひめゆり平和祈念資料館資料館だより』〈第65号〉（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和記念資料館、2020年）	公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和記念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『ひめゆり平和祈念資料館資料館だより』〈第66号〉（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和記念資料館、2020年）	公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和記念資料館	ひめゆり平和祈念資料館
『船浦中学校創立五十周年記念誌　沃野』（竹富町立船浦中学校　創立五十周年記念事業期成会、2010年）	冨里保雄　他13名	田代仁
『法政大学沖縄文化研究所所報』〈第87号〉（法政大学沖縄文化研究所、2021年）	法政大学沖縄文化研究所	沖縄文化研究所所長
『法政大学沖縄文化研究所所報』〈第88号〉（法政大学沖縄文化研究所、2021年）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所
『干立のシマフサラー～西表島に伝わる防災儀礼～』（くまのみ自然学校、1990年）	伊谷玄	伊谷玄
『学びの歴史像－わたりあう近代－』（大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、2021年）	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館
『眉の清らさぞ神の島－上野英信沖縄』（一葉社、2020年）	三木健	三木健
『八重瀬の沖縄戦資料収集調査事業調査報告書』（八重瀬町役場、2021年）	八重瀬町教育委員会	八重瀬町教育委員会　生涯学習文化課
『柳田國男　歌碑建立記念誌　たから貝』（柳田國男歌碑建立期成会、2004年）	石垣繁編	崎山石材
『歴代宝案』訳注本第８冊　語注一覧表〈歴代宝案編集参考資料22〉（沖縄県教育委員会、2021年）	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班
『歴代宝案』訳注本第８冊〈第２集巻90～104〉（沖縄県教育委員会、2021年）	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班
『歴代寶案』校訂本第１冊（活字本）〈第１集巻１～巻22〉〈歴代宝案補遺編１〉（沖縄県教育委員会、2021年）	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班	沖縄県教育庁文化財課 史料編集班
『60年安保と京都大学』－西里喜行とその時代（２）－〈第71巻第１号〉（小樽商科大学商学討究、2020年）	小樽商科大学商学討究	今西一
『忘れな石』（草の根出版会、1992年）	文・宮良作　絵・宮良瑛子	崎山石材
『忘勿石　忘勿石之碑建立事業記念誌』（忘勿石之碑建立事業期成会、1992年）	忘勿石期成会	崎山石材
『八重山の戦争　－戦後75年企画展写真・映像・証言で見る－』（2020年）	八重山平和祈念館	八重山平和祈念館
ＤＶＤ「やいまぴとぅ　コロナに負けるな　応援メッセージビデオ」	八重山広域市町村圏事務組合	八重山広域市町村圏事務組合

編 集 後 記

『竹富町史 第八巻 西表島』〈上巻〉に収載を予定していたコラム「波の上炭坑のなぞ」から派生した「波の上炭坑探索」、それを受けて「波上炭坑探索記」を寄稿いただきました。

幼いころから身近に眺めていた場所が、このように謎に満ちた場所であったことにとても驚きました。調べてみると、今まで見えなかった炭坑の様子が、少しずつ見えるようになってきました。山奥の密林の中に、確かに人の手が加わった痕跡や、生活の息づかいを感じることができました。

また、表紙の写真を通して「ムシャーマ」について調べてきましたが、限られた紙面の中では書ききれなかったことが沢山ありました。「ムシャーマ」をはじめ、波照間島についてもっと詳しく知りたい方は、前掲の『竹富町史 第七巻 波照間島』、および『波照間島のムシャーマ』などの文献を御参照いただけたらと思います。

日常から非日常へ、そしてまた日常へと戻ってくるムシャーマ全体の流れには、ムシャーマの一日は確かにそこにあって、目に見えたものなのに、実はどこか知らないところに繋がっていて、人はその二つの世界を行き来しているのかもしれません。

実際には見たことのない炭坑の生活と、ムシャーマの一日に思いを馳せることができました。

（米盛恭子）

2022年３月31日発行

竹 富 町 史 だ よ り

第49号

編集発行　竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町６－18－３F

TEL　0980－87－6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp